災害時の援助行動

——静岡駅前地下街ガス爆発事故における献血行動——

高　木　　修
松　本　　敦

Ⅰ　はじめに
Ⅱ　問　題
Ⅲ　ガス爆発事故の状況
Ⅳ　研究の方法
　1.　調査事項と調査票
　2.　調査対象
　3.　サンプルの抽出
　4.　調査の方法と調査票の回収状況
　5.　調査対象者の概要
Ⅴ　調査の結果
　1.　情報の受容と伝達，及びその影響について
　2.　献血者の行動の特徴
　3.　献血一般について
　4.　ガス爆発事故の認知とかかわり
　5.　地域社会とのかかわり
Ⅵ　おわりに

Ⅰ　はじめに

台風，洪水，津波，火山噴火，ガス爆発などの大災害から路上における通行人の転倒まで緊急に援助を必要とする事態に我々は直面してきた。そのような状況下で人々は，どのような心理的過程を経て他者を援助するのであろうか。そこでの援助は，非緊急状況での援助といかに相違するのであろうか。

緊急事態とは，どのような状況を意味するのであろうか。Latané & Darley (1970) は，緊急状況が次の5つの明確な特徴を持っていると指摘している。

1.　それは，生命や財産に対する加害の恐れ，あるいは実際の加害を含んでいる。緊急事態への介入は，援助者を危険にさらすことさえありうる。

2.　それは，珍しい，稀な出来事である。普通，人々は，そのような事態に直面することが，非常に稀れであり，その状況を処理した経験をまったく，あるいはほとんど持っていない。

3. それは，独特のものである。緊急状況はそれぞれ特殊な問題を提起し，独特の型の介入を必要とする。そして，各状況は援助者が種々の介入技術を持っていることを要求する。
4. それは，通常予知出来ない不測のものである。そのため予め何らかの介入を計画することは不可能である。しかし，洪水や火山噴火のように予測できる緊急事態もいくらか存在する。
5. それは，即座の介入を必要とする。介入の遅れは，悲劇的な結果の原因になりうる。潜在的援助者は事態が悪化する前に速かに反応するよう圧力を受ける。

Piliavin & Piliavin (1972) は，以上の5つの特徴に加えて，緊急事態が1つの心理的覚醒状態であるという特徴を挙げている。Bar-Tal (1976) はさらに，可能な介入の性質，すなわち，直接的介入と間接的介入によって緊急状況を特徴づけている。前者の介入は，援助者自身が実際にその状況に入り込むものであり，後者の介入は，緊急事態を処理する資格のある誰かにその事態を告げて援助を要請するものである。

いく人かの心理学者は，緊急状況下での援助行動生起の心理過程モデルを提案している。Latané & Darley (1970) も，緊急状況における援助の過程に関して「意志決定モデル」(Decision-Making Model) を提案した。このモデルは，一連の，しかも循環的な5つの決定から構成されている。まず第1段階の決定は，「人は何かが起こっていることに気付かなければならない」というものである。あまりにも自分自身のことばかりに気を取られている人は，自分の周りで起こっている緊急事態に気付かないことがある。つぎに第2段階として，「人はその出来事が緊急なものかどうかを決定しなければならない」。一般に稀れで不明瞭な緊急状況でのこの決定は，必ずしも容易でなく，過去に同じような状況に直面したかどうか，他の人はどのように反応しているかといったいくつかの変数によって影響される。出来事に気付き，それが緊急のものであると識別した人が直面する第3決定は，「援助しなければならない個人的責任性を受け入れるかどうか」である。事態に介入し，何らかの出費を覚悟するよりはむしろ，その責任を回避する決定を下せば，当然援助は生起しない。そこで個人的責任性の受容に影響する変数が問題となる。第4段階で，「人は，どのような形式の介入を，すなわち，直接的介入か間接的介入のいずれを採るかを決定し，さらに，その場合にどのような方法が利用可能であり，その中のどれを使うかを選定しなければならない」。最後の第5段階において，「人は，第4段階で決定された方法をいかに履行するかを決定しなければならい」。以上の各段階を介入の方向で満たしてきた潜在的援助者は，この時点で行動を開始する。Latané & Darley は，この意志決定の過程で影響を及ぼす変数を研究するために，3つの有名なパラダイム (Latané & Darley, 1968 ; Darley & Latané, 1968 ; Latané & Rodin, 1969) を発展させた。Latané たちは，これらの研究を通して，傍観者効果 (Bystander effect) を確証した。

Piliavin, Rodin, & Piliavin (1969) や Piliavin & Piliavin (1972) は，緊急状況に対する反応の2位相モデル (Two-Stage Model) を発表した。このモデルは，以下の仮定を含んでいる。すなわち，緊急事態の観察は傍観者のなかに情緒的覚醒状態を引き起こす。この状態は，恐

れ，嫌悪，同情，あるいはそれらの組み合わさったものとは異なる。この覚醒の水準は，(a)犠牲者に同情できるほど，(b)緊急事態の近くにいるほど，(c)介入なしに緊急事態の状態が長く持続するほど，一層高い。またこの状態は多数の可能な反応のいずれかによって低減される。すなわち，(a)直接援助する，(b)援助を求めに出掛ける，(c)緊急事態から逃げ出す，そして(d)援助に値しないとして牲犠者を拒絶する，という反応である。なお，選択される反応は，援助出費（努力，当惑，不快な経験，身体的危害，など），非援助出費（恥，他者からの非難，など），援助報酬（自己満足，他者からの賞賛，など），非援助報酬（介入せずに他の活動を連続することから得られる報酬）から成る出費—報酬マトリックスの関数で決定される。たとえば，Piliavin & Piliavin (1972) は，特に援助および非援助の出費の観点から，**表Ⅰ-1** のように，反応の型を予測している。なお，このモデルに含まれる主要な動機は，“愛他的な”，すなわち，ポジティブな動機ではなく，むしろ，不快な情緒状態から自分自身が逃れたいという利己的な動機からであることに注意しなければならない。

表Ⅰ—1 援助に伴う出費の種々の組み合せにおいて最も起こりやすい反応のマトリックス（Piliavin & Piliavin, 1972）

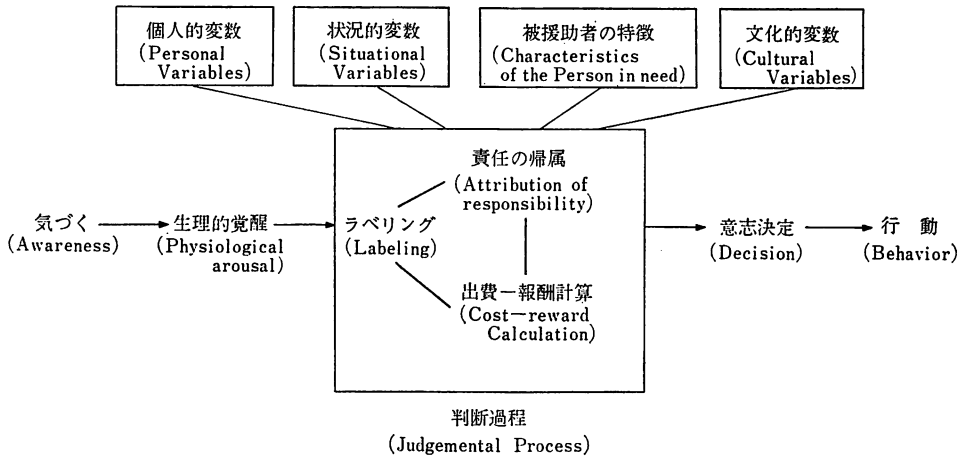
非援助の正味の出費	援助の正味の出費	
	低	高
高	直接的介入	間接的介入
低	多様なバリエーション 人格の関数で決定される	逃避あるいは無視

Piliavin たち (Piliavin et al., 1969 ; Piliavin & Piliavin, 1972) は，このモデルから引き出された予言を確証するために，地下鉄車輌内での有名な野外実験を行なった。そして，Latané たちの責任の分散仮説を支持しない，すなわち，非常に愛他的な傍観者を発見した。

Bar-Tal (1976) は，緊急状況に介入するかどうかを決定する傍観者の意志決定の過程に関するモデル（**図Ⅰ-1**）を提案した。彼は，緊急状況における行動が主として状況の解釈，犠牲者の責任の帰属，そして傍観者が計算する種々の出費と報酬によって相違すると仮定した。

意志決定過程の第1段階として，人は何かが起こっていることに気付く。牲犠者は緊急状況において，直接的に，あるいは間接的に援助を要請するか，もしくは全く訴えを行なわない。前二者の場合，犠牲者が傍観者に代わって事態を定義するが，最後の場合は，傍観者自身が状況の性質を判断しなければならない。多くの緊急状況は不明瞭である。その稀れな見慣れぬ出来事に気付くと，第2段階として生理的覚醒が喚起される。

意志決定過定の第3段階は，相互に作用し合う3つの判断から成っている。そのひとつとして人は状況が緊急のものであるかどうかを判断しなければならない。直接にしろ，間接にしろ犠牲者が援助を求める場合，状況の分類は簡単である。しかし要請のない場合，状況の種々の要素を手



図Ⅰ—1　緊急時における援助の意志決定モデル（Bar-Tal, 1976）

掛りに，事態のラベリングが必要である。もうひとつは，なぜ犠牲者が困っているのかの責任の帰属判断である。傍観者は，観察された行動を基にして，犠牲者に意図や傾性を帰属し，緊急事態の要因を推定する。犠牲者の統制を越えていると外的帰属するか，それとも犠牲者の統制の範囲内にあると内的帰属するかのいずれかである。一般に，傍観者は内的理由ゆえに困っている人の援助を嫌がる。緊急状況に直面した人は，さらに，自分の決定の重要な結果として，援助と非援助に伴う出費と報酬を計算する。緊急状況での援助は，しばしば大きな出費を含む。潜在的に援助に伴う出費には，費やす努力，浪費する時間，直面する危険，そして犠牲者の援助拒否による当惑などが含まれる。心理的な援助出費として，援助失敗による不快な経験もある。また，非援助出費は特に心理的なものであり，恥，罪障感，犠牲者への共感的苦悩，そして社会的，個人的非難などを含む。

他方，援助報酬は，有能感覚，満足，自尊心の高揚，良いムード，そして犠牲者からの賞讃や感謝のように，大部分が心理的なものである。また，非援助報酬は，援助によって妨げられる活動に連合しているすべての利益から成る。潜在的援助者は，緊急状況への介入に伴うこれらの出費や報酬を計算して，介入するかどうかを決定する。しかし，計算に基づく判断は，必ずしも合理的なものとは限らず，その特定の側面が強調されたり，感情的になったりすることがある。

以上のラベリングと責任の帰属と出費—報酬計算は，相互に影響し合って，介入するかどうかの傍観者の意志決定を規定し，決定された行動の実現へと進展する。その際これらの認知的判断は，**図Ⅰ-1**のように，4種類の変数によって影響される。

個人的変数は，緊急状況における援助と結びつき，援助するかどうかの決定に影響する潜在的援助者の個人的特徴を含む。具体的には，彼らの人口統計学上の特徴（たとえば，性別，人種，年齢など）と人格特性（たとえば，社会的責任性，道徳性，共感性，種々の性格など）である。状況変数は，緊急事態を取り囲む環境の特徴を含む。その中でも特に重要だとされているのは，

その事態を一人で目撃したか，それとも他の傍観者と一緒に目撃したかという他者の存在である。またその他者の特徴と示範行動，傍観者の空間的位置，および時間の切迫なども介入するかどうかの決定に影響を与える。被援助者の特徴も認知的判断過程に影響を与える。その主要なもののひとつは性別であり，特に援助者と被援助者の性別の組み合わせで介入に違いが生じることがある。もうひとつは，同様に両者の間の態度などの類似性である。判断過程に影響する最後の変数は，援助・非援助に関連するライフ・スタイルや下位文化を含み，それらの差異が異なる判断をもたらすのである。

Ⅱ 問　　題

緊急状況における援助行動の研究は，もっぱら，前述のような特徴を持つ事態を実験室の内に生起させ，前述のようなモデルに沿って，援助行動を促進する，あるいは抑制する要因を考察し，さらにモデルの妥当性を検討するという仕方で行なわれてきた。そしてその結果，規定要因がかなり発見され，モデルの妥当性もかなり確認されてきた。しかしながら，現実感を伴う野外実験は別にしても，多数の研究は実験室内実験であり，いかに工夫されても人工的になり勝ちであった。しかも緊急事態の範囲は狭く，個人的介入の様式が主であり，事態の持続時間も短期的であるものが多かった。そこで，現実の社会において実際に生起した緊急事態に際して，どのように援助行動が起こり，あるいは抑制されるかを研究してみることは，以前の研究傾向との関連で意義あるものと考える。

この研究では，実際に発生した災害的緊急事態に焦点を当て，その事態への介入の有無を規定する要因と介入の仕方の特徴を明らかにする。また，緊急事態への介入の初期要件であるところの“出来事に気づくこと”に関係して，緊急事態に関する情報や事態への介入要請の情報の伝播の仕方についても検討を加える。

Ⅲ ガス爆発事故の状況

昭和55年８月16日朝，国鉄静岡駅前「紺屋町ゴールデン地下街」でガス爆発事故が発生した。このガス爆発は，２度にわたって起こり，死者14人，重軽傷者199人を出す大惨事となった。

最初の爆発は，９時30分頃に発生した。静岡県消防本部は，119番通報により消防隊員約40人を出動させた。この時，同本部は第一報をガス漏れと判断していた。しかし，現場では地下街の２店舗が爆発中であり，消防隊員は消火作業に追われ，火事見物の人々の規制にあたる人数に余裕がない状態だった。９時50分，事故現場でさらにかなりの量のガスが充満していることを検知するが，いぜんとしてガス会社の係員と連絡がとれないでいた。同56分，大爆発発生，現場より本部に対して「全隊出動」が要請された。この２度目の爆発によって，消防士，警察官をはじめ，

火事場見物に集まった人々を巻き込んでの大惨事となった。

静岡県赤十字血液センターでは，「ガス爆発で負傷者多数」の知らせを受け，大量の輸血用血液が必要になると判断し，事故発生からおよそ1時間後に，市内のテレビ及びラジオ局に依頼し，「緊急に血液がいるので献血に協力して欲しい」と呼びかけた。その結果，放送直後から，同センター近くに住む市民の献血申し出が殺到し，午後2時頃までに300人を越える献血者が詰めかけた。同センターでは，2階の診療室だけではさばき切れず，採血車を玄関前に繰り出し，10人の医師を総動員して，採血作業を進めた。採取された300本の血液は，市内11ケ所の病院に緊急輸送され，負傷者の輸血に役立てられた。

Ⅳ 研究の方法

1. 調査事項と調査票

この研究の目的は，緊急事態への介入の有無を規定する要因と介入の仕方の特徴を明らかにすること，さらに緊急事態に関する情報や援助要請の情報の伝幡の仕方を明らかにすることである。そこで，この目的を達成するために，以下に示す7つの観点から成る合計56項目の質問紙調査票を作成した（付表を参照）。

(1) 献血依頼情報の受容と伝達，及びその影響について
(2) 献血者の行動の特徴について
(3) 献血全般に関する知識について
(4) 過去の献血・輸血経験について
(5) ガス爆発事故の認知とかかわりについて
(6) 地域社会とのかかわりについて
(7) デモグラフィック要因について

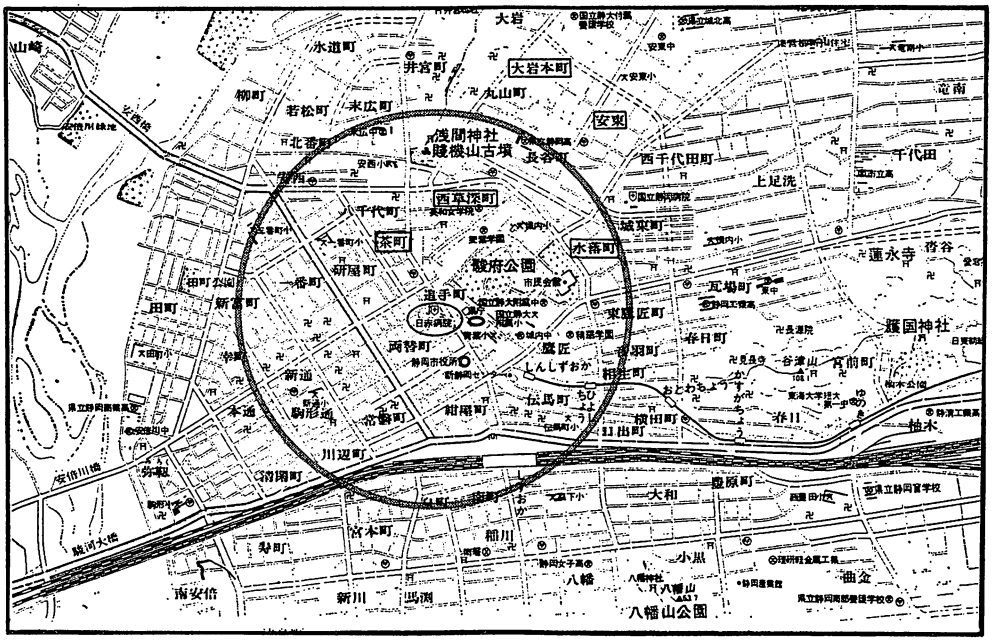
2. 調査対象

かなりの部分の調査事項は，緊急状況において献血した者と献血しなかった者との比較を必要とする。そこで以下のような2種類の被調査者群を選定した。

1）献血者群：静岡県赤十字血液センターにおいて献血した者
2）非献血者群：同血液センターから半径1km内外のところに住む一般市民

3. サンプルの抽出

県血液センターに献血を申し出て，実際に献血した者のうちで，住所が確定できた374名を献血者群の対象者とした。



図Ⅳ—3—1　静岡市街地図（1/30,000）

また，非献血者群の対象者は，献血の呼びかけを行なった県血液センターにある程度近い地域の住民とした。そこで，第1段階として血液センターから半径約1km内外にある3つの投票区からそれぞれ2つの町を有意抽出した。抽出された地域は，以下の6つの町である（図Ⅳ-3-1を参照）。

第2投票区　西草深町，水落町

第8投票区　茶町1丁目，茶町2丁目

第52投票区　安東1丁目，大岩本町

次に，第2段階として，上記の対象選定地域の選挙人名簿から対象者，合計300名を無作為抽出した。各町ごとの抽出人数は，以下の通りである。

西草深町	50名，	水落町	50名
茶町1丁目	10名，	茶町2丁目	10名
安東1丁目	90名，	大岩本町	90名

4.　調査の方法と調査票の回収状況

調査票は，ガス爆発事故からほぼ1ケ月後の，昭和55年9月20日に対象者に郵送し，回答後返送を求めた。回収状況は，表Ⅳ-4-1に示されている通りである。

5.　調査対象者の概要

性別，年代，職業，学歴，結婚状況，家族数の各項目について，献血者群と非献血者群とを比

表Ⅳ—4—1　対象群別回収状況

	票　本　数	有効回収数	有効回収率
献　血　者　群	374名	272名	72.7%
非　献　血　者　群	300名	95名	31.7%
計	674名	367名	54.5%

表Ⅳ—5—1　性　　別

	男　　性	女　　性	計
献　血　者　群	208 76.5　81.6	64 23.5　57.1	272 74.1
非　献　血　者　群	47 49.5　18.4	48 50.5　42.9	95 25.9
全　　体	255 69.5	112 30.5	367 100.0

較しながら，調査対象者の特徴を概観する。なお，以下の分析においては，無回答の標本は分析から除外してあるため，表により母数が異なることがある。

1）性　別

男性の割合いは，非献血者群の場合（49.5%）に比して，献血者群のその割合い（76.5%）の方が有意に大きい（**表Ⅳ-5-1**）。

2）年　代

非献血者群では，対象者が各年代にほぼ均等な割合いで見られるのに対して，献血者群では，30代以下の者の割合が76.5%と大きく，50代以上では1割にも満たない（**表Ⅳ-5-2**）。

表Ⅳ—5—2　年　　代

	20才代以下	30　才　代	40　才　代	50　才　代	60才代以上	計
献血者群	128 47.1　88.9	80 29.4　80.8	40 14.7　70.2	20 7.4　51.3	4 1.5　14.3	272 74.1
非献血者群	16 16.8　11.1	19 20.0　19.2	17 17.9　29.8	19 20.0　48.7	24 25.3　85.7	95 25.9
全　　体	144 39.2	99 27.0	57 15.5	39 10.6	28 7.6	367 100.0

3）職　業

献血者群では，「工員・店員」（20.3%），「事務・職員」（19.6%），「学生」（15.9%）が多く見られる。それに対して，非献血者群では，「無職」（主に主婦，32.6%），「管理職」，「事務・職

表Ⅳ—5—3　職　　業

	専門職	管理職	事務・職員	工員・店員	自営業	学　生	その他	無　職	計
献血者群	31 11.4 77.5	15 5.5 53.6	53 19.6 80.3	55 20.3 88.7	40 14.8 75.5	43 15.4 100.0	28 10.3 75.7	6 2.2 16.2	271 74.0
非献血者群	9 9.5 22.5	13 13.7 46.4	13 13.7 19.7	7 7.4 11.3	13 13.7 24.5	0 0.0 0.0	9 9.5 24.3	31 32.6 83.8	95 26.0
全　体	40 10.9	28 7.7	66 18.0	62 16.9	53 14.5	43 11.7	37 10.1	37 10.1	366 100.0

員」（共に13.7%）が多い（**表Ⅳ-5-3**）。

4）学　歴

献血者群と非献血者群との間に大きな差は見られない(**表Ⅳ-5-4**)。

表Ⅳ—5—4　学　　歴

	義務教育	高　校	短　大	大　学	計
献血者群	52 19.4　75.4	123 45.9　72.8	31 11.6　79.5	62 23.1　72.1	268 73.8
非献血者群	17 17.9　24.6	46 48.4　27.2	8 8.4　20.5	24 25.3　27.9	95 26.2
全　体	69 19.0	169 46.6	39 10.7	86 23.7	363 100.0

5）結婚状況

献血者群では「未婚者」（50.4%）と「既婚者」（49.6%）との割合いに大きな差は見られない。それに対して，非献血者群では，「既婚者」（83.9%）の割合いが圧倒的に大きい(**表Ⅳ-5-5**)。

表Ⅳ—5—5　結婚状況

	未　婚	既　婚	計
献血者群	116 50.4　89.2	114 49.6　66.4	230 72.6
非献血者群	14 16.1　10.8	73 83.9　33.6	87 27.4
全　体	130 41.0	187 59.0	317 100.0

6）家族数

献血者群（73.8%）の方が非献血者群（60%）よりも，「4人以上」の大家族である者の割合

表Ⅳ—5—6 家　族　数

	1人～3人	4人～5人	6人以上	計
献血者群	71 26.1　65.1	142 52.4　76.8	58 21.4　80.6	271 74.0
非献血者群	38 40.0　34.9	43 45.3　23.2	14 14.7　19.4	95 26.0
全体	109 29.8	185 50.5	72 19.7	366 100.0

いが一層大きい(表Ⅳ-5-6)。

Ⅴ 調査の結果

1. 情報の受容と伝達，及びその影響について

前述のように，Latané & Darley (1970)や Bar-Tal (1976) は，共に緊急事態のもとにおける援助者の意志決定のプロセスに関するモデルを提案した。そこに示された段階は，まず，「事態に気づく」段階，次に「事態の解釈」や「生理的覚醒」の段階，そして行動の決定にいたるいくつかの判断過程の段階である。行動決定の判断過程には，「援助の個人的責任性の受容の判断」，「被援助者の責任の帰属の判断」，「出費と報酬の計算」，「介入の形式，方法の判断」等が含まれる。そこで，本研究においても，この各段階を考慮しつつ分析を行なう。本節では，特に援助要請の情報が，人々にどのように受け取られ，また伝えられて行ったかという「情報の流れ」に焦点をあて，「事態に気づくこと」，「事態の解釈」，さらに「援助の個人的責任性の受容の判断」等に関連する項目を取り上げる。

1）情報接触

ガス爆発事故発生後，県赤十字血液センターは，テレビ・ラジオを通じて，輸血用血液の献血の依頼を行なった。この献血呼びかけの情報にどのくらいの人々が接触していたのだろうか。こ

表Ⅴ—1—1 献血依頼情報の接触状況

	聞いた	聞かなかった	計
献血者群	259 95.2　85.5	13 4.8　20.3	272 74.1
非献血者群	44 46.3　14.5	51 53.7　79.7	95 25.9
全体	303 82.6	64 17.4	367 100.0

の調査対象者の献血依頼情報の接触状況は，**表Ⅳ-1-1**の通りである。

献血依頼情報に接触した人の割合いは，献血者群で95.2％と非常に高い。これに対して，非献血者群では，情報に接触した人の割合いは，46.3％であり，情報を「聞かなかった」と回答した人が半数を越えている。また，献血者群においては，4.8％の人が情報を「聞かなかった」と回答しているが，これらの人々は，偶然，事故現場あるいは，採血現場を通り合わせ，献血した人たちだと思われる。

2）情報接触の時間

献血依頼の情報を対象者たちは，いつ見たり聞いたりしたのだろうか。情報の接触には，ある人がテレビで見た後，他の人からも同じ情報を聞くというように，複数の機会が考えられる。この調査では，情報の受容と伝達に関する質問のすべてにおいて最大限3回目までの情報について回答を求めている。分析に際しては，3回分の回答を合わせて，多重回答の形式とみなし，「総合」として処理することにした。3回分を合計した理由は，主として，第2，第3の情報に対する回答が少なく，それぞれを独立して比較することが不可能であったためである。しかしながら，各問題の必要に応じて，第1情報，第2情報，第3情報として区別して分析したところもある。

また，情報の受容と伝達に関する項目の分析は，献血依頼情報を聞いた者，すなわち献血者群の259名，非献血者群の44名の合計303名を対象に行なった。

献血者群では，11時台に最も多くの人が献血依頼情報に接している。これに対して，非献血者群では，13時以降にその情報に初めて接している人が最も多い。特に献血者群では，12時台までで，ほとんどすべての人達（97.2％）が，献血依頼情報に接しており，非献血者に較べて早い時点での情報の接触が特徴となっている（**表Ⅴ-1-5**）。

また，献血者群について，献血依頼情報の接触の機会別にその時刻を見ると，第1情報では，情報に接した人の割合いが最も高いのは11時台である（**表Ⅴ-1-2**）。ところが，第2情報ではその割合いが最も高いのは，12時台，第3情報では13時以降になっている（**表Ⅴ-1-3，Ⅴ-1-4**）。このことは，献血者が短い時間内にいくつもの情報に接して行動に出たというよりも，むしろ，行動後もかなりの時間にわたって，その情報に注意を向けていたのだと思われる。

表Ⅴ—1—2　献血依頼情報の接触時刻（第1情報）

	10 時 台	11 時 台	12 時 台	13時以降	計
献血者	40 16.0　97.6	125 50.0　96.2	69 27.6　86.2	16 6.4　53.3	250 89.0
非献血者	1 3.2　2.4	5 16.1　3.8	11 35.5　13.7	14 45.2　46.7	31 11.0
全体	41 14.6	130 46.3	80 28.5	30 10.7	281 100.0

表V—1—3　献血依頼情報の接触時刻（第2情報）

	10 時 台	11 時 台	12 時 台	13時以降	計
献血者	3 8.1　100.0	9 24.3　100.0	15 40.5　93.8	10 27.0　58.8	37 82.2
非献血者	0 0.0　0.0	0 0.0　0.0	1 12.5　6.3	7 87.5　41.2	8 17.8
全体	3 6.7	9 20.0	16 35.6	17 37.8	45 100.0

表V—1—4　献血依頼情報の接触時刻（第3情報）

	10 時 台	11 時 台	12 時 台	13時以降	計
献血者	0 0.0　0.0	1 5.6　100.0	7 38.9　100.0	10 55.6　71.4	18 81.8
非献血者	0 0.0　0.0	0 0.0　0.0	0 0.0　0.0	4 100.0　28.6	4 18.2
全体	0 0.0	1 4.5	7 31.8	14 63.6	22 100.0

表V—1—5　献血依頼情報の接触時刻（総合）

	10 時 台	11 時 台	12 時 台	13時以降	計
献血者	43 14.1　97.7	135 44.3　96.4	91 29.8　88.3	36 1.2　59.0	305 87.6
非献血者	1 2.3　2.3	5 11.6　3.6	12 27.9　11.7	25 58.1　41.0	43 12.4
全体	44 12.6	140 40.2	103 29.6	61 17.5	348 100.0

3）献血依頼情報の情報源

人々は，献血依頼の情報を誰から，あるいは，何によって聞いたのだろうか。我々は，考えられる情報源として次の10項目を用いた。「家族」，「親せき」，「近所の人」，「職場の人」，「サークルのメンバー」，「友人・知人」，「見知らぬ人」，「テレビ」，「ラジオ」，そして「その他」，である。

3回の情報を総合してみると，献血者群，非献血者群ともにテレビを情報源にしている人が最も多く，いずれも6割を越えている（**表V-1-6**）。

また，この9つの情報源は，「パーソナルなもの」，と「マス・メディアによるもの」とに分類できる。すなわち，1から7番目までの項目は，「パーソナル・メディア」として，8番目，9

表V—1—6　献血依頼情報の情報源（総合）

	家族	親せき	近所の人	職場の人	サークルのメンバー	友人・知人	見知らぬ人	テレビ	ラジオ	その他	計
献血者	14 4.5 82.4	0 0.0 0.0	3 1.0 100.0	13 4.2 72.2	3 1.0 100.0	9 2.9 81.8	5 1.6 71.4	197 63.3 85.3	56 18.0 88.9	11 3.5 84.6	311 85.0
非献血者	3 5.5 17.6	0 0.0 0.0	0 0.0 0.0	5 9.1 27.8	0 0.0 0.0	2 3.6 18.2	2 3.6 28.6	34 61.8 14.7	7 12.7 11.1	2 3.6 15.4	55 15.0
全体	17 4.6	0 0.0	3 0.8	18 4.9	3 0.8	11 3.0	7 1.9	231 63.1	63 17.2	13 3.6	366 100.0

番目は「マス・メディア」として考えることができる。この分類によって献血者群と非献血者群を比較すると，両群共に，マス・メディアを情報源とする者の割合いが高く見られる。しかしながら非献血者群のパーソナルなメディアを情報源とする者の割合いが，献血者群のそれよりも幾分高い傾向が認められる（**表V-1-7**）。

さらに，3度の情報を個別に見ても，第1情報から第3情報まで，いずれも，マス・メディアを情報源とする者の割合いが高い。このことは，複数の情報受容が，マス・メディアの繰り返えしの接触によって行なわれていたことを示している（**表V-1-8**，**表V-1-9**，**表V-1-10**）。

表V—1—7　献血依頼情報の情報源（2分類，総合）

	パーソナル・メディア	マス・メディア	計
献血者	47 15.7　78.3	253 84.3　86.1	300 84.7
非献血者	13 24.1　21.7	41 75.9　13.9	54 15.3
全体	60 16.9	294 83.1	354 100.0

表V—1—8　献血依頼情報の情報源（2分類，第1情報）

	パーソナル・メディア	マス・メディア	計
献血者	40 16.1　81.6	209 83.9　87.1	249 86.2
非献血者	9 22.5　18.4	31 77.5　12.9	40 13.8
全体	49 17.0	240 83.0	289 100.0

表V—1—9 献血依頼情報の情報源（2分類，第2情報）

	パーソナル・メディア	マス・メディア	計
献血者	6 16.7　75.0	30 83.3　81.1	36 80.0
非献血者	2 22.2　25.0	7 77.8　18.9	9 20.0
全体	8 17.8	37 82.2	45 100.0

表V—1—10 献血依頼情報の情報源（2分類，第3情報）

	パーソナル・メディア	マス・メディア	計
献血者	1 6.7　33.3	14 93.3　82.4	15 75.0
非献血者	2 40.0　66.7	3 60.0　17.6	5 25.0
全体	3 15.0	17 85.0	20 100.0

4）献血依頼情報の接触場所

献血依頼情報に接した人達は，どこでその情報を受容したのであろうか。献血者，非献血者の両群共に，「自宅」で情報に接した者が最も多く，次いで「職場」で接した者が多い(**表V-1-11**)。

また，接触場所の項目の中から「訪問先で」，「市場・商店で」，「路上で」，「電車・バスの中で」の4項目を合わせて「外出先で」とし，「学校で」と「その他」を合わせて「学校，その他」として比較したのが**表V-1-12**である。この表から見ると，統計的に有意ではないが，「外出先」，「自動車の中」，「学校，その他」といった場所で情報に接した者は，献血者群に多く，「自宅」，「職場」で情報に接した者は，非献血者群に多く見られるようである（**表V-1-12**)。

表V—1—11 献血依頼情報の接触場所（総合）

	自宅で	訪問先で	職場で	市場・商店で	路上で	電車・バスで	自動車の中で	学校で	その他	計
献血者	160 51.1 82.9	19 6.1 90.5	66 21.1 80.5	11 3.5 100.0	7 2.2 77.8	1 0.3 100.0	24 7.7 92.3	2 0.6 100.0	23 7.3 88.5	313 84.4
非献血者	33 56.9 17.1	2 3.4 9.5	16 27.6 19.5	0 0.0 0.0	2 3.4 22.2	0 0.0 0.0	2 3.4 7.7	0 0.0 0.0	3 5.2 11.5	58 15.6
全体	193 52.0	21 5.7	82 22.1	11 3.0	9 2.4	1 0.3	26 7.0	2 0.5	26 7.0	371 100.0

表V—1—12　献血依頼情報の接触場所（5分類，総合）

	自宅で	職場で	外出先で	自動車の中で	学校・その他	計
献血者	160 51.1　82.9	66 21.1　80.5	38 12.1　90.5	24 7.7　92.3	25 8.0　89.3	313 84.4
非献血者	33 56.9　17.1	16 27.6　19.5	4 6.9　9.5	2 3.4　7.7	3 5.2　10.7	58 15.6
全体	193 52.0	82 22.1	42 11.3	26 7.0	28 7.5	371 100.0

5）献血依頼情報の接触方法

先の第3項，「献血依頼情報の情報源」においても，ほとんどの人達が献血依頼の情報を，テレビ・ラジオというマス・コミを通じて得ていたように，情報接触の最大の方法は，「マス・コミの利用」である。マス・コミ以外から情報を得た者では「口頭」による者が多く，特に非献血者群において，その傾向がわずかながら強く見られる（**表V-1-13**）。

表V—1—13　献血依頼情報の接触方法（総合）

	口頭で	電話で	テレビ・ラジオで	その他	計
献血者	38 12.3　76.0	5 1.6　100.0	260 83.9　85.5	7 2.3　77.8	310 84.2
非献血者	12 20.7　24.0	0 0.0　0.0	44 75.9　14.5	2 3.4　22.2	58 15.8
全体	50 13.6	5 1.4	304 82.6	9 2.4	368 100.0

6）献血依頼情報の勧誘度

人々は，接触した情報をどのようなものとして知覚していたのだろうか。その情報の献血への勧誘の程度は，どの程度だったのだろうか。それは勧誘的なものだったのか，それとも単に情報を伝えるだけのものだったのだろうか。

我々は，接触した情報の性質について，「非常に勧誘的」(5点)から「まったく伝えるだけ」(1点）までの5段階で評定することを求めた。その結果，献血者群(平均3.81点，分散1.67)と，非献血者群（平均3.25点，分散1.69）との間に有意な差が認められた（$t=2.92$，$df=360$，$p<.01$)。すなわち，これは，献血者群の方が非献血者群よりも一層，接触した情報に関して，この情報は自分達に献血することを勧めていると感じていたことを示している（**表V-1-14**）。

つぎに，これを3度の情報接触の機会別にみると，献血者群の方が接触情報をより勧誘的に感じていたという傾向は，第1情報の接触時において顕著であるが，第2情報，第3情報では有意な差は見られない（**表V-1-15，V-1-16，V-1-17**）。これは，献血者が衝撃的な最初の情報に接

表V—1—14　献血依頼情報の知覚された勧誘度（総合）

	非常に勧誘的	やや勧誘的	どちらともいえない	どちらかといえば伝えるだけ	まったく伝えるだけ	計
献血者	122 39.5　92.4	88 28.5　85.4	44 14.2　77.2	27 8.7　77.1	28 9.1　80.0	309 85.4
非献血者	10 18.9　7.6	15 28.3　14.6	13 24.5　22.8	8 15.1　22.9	7 13.2　20.0	53 14.6
全体	132 36.5	103 28.5	57 15.7	35 9.7	35 9.7	362 100.0

表V—1—15　献血依頼情報の知覚された勧誘度（第1情報）

	非常に勧誘的	やや勧誘的	どちらともいえない	どちらかといえば伝えるだけ	まったく伝えるだけ	計
献血者	107 41.8　94.7	76 29.7　87.4	32 12.5　80.0	24 9.4　75.0	17 6.6　70.8	256 86.5
非献血者	6 15.0　5.3	11 27.5　12.6	8 20.0　20.0	8 20.0　25.0	7 17.5　29.2	40 13.5
全体	113 38.2	87 29.4	40 13.5	32 10.8	24 8.1	296 100.0

表V—1—16　献血依頼情報の知覚された勧誘度（第2情報）

	非常に勧誘的	やや勧誘的	どちらともいえない	どちらかといえば伝えるだけ	まったく伝えるだけ	計
献血者	9 25.0　75.0	8 22.2　80.0	9 25.0　75.0	3 8.3　100.0	7 19.4　100.0	36 81.8
非献血者	3 37.5　25.0	2 25.0　20.0	3 37.5　25.0	0 0.0　0.0	0 0.0　0.0	8 18.2
全体	12 27.3	10 22.7	12 27.3	3 6.8	7 15.9	44 100.0

表V—1—17　献血依頼情報の知覚された勧誘度（第3情報）

	非常に勧誘的	やや勧誘的	どちらともいえない	どちらかといえば伝えるだけ	まったく伝えるだけ	計
献血者	6 35.3　85.7	4 23.5　66.7	3 17.6　60.0	0 0.0　0.0	4 23.5　100.0	17 77.3
非献血者	1 20.0　14.3	2 40.0　33.3	2 40.0　40.0	0 0.0　0.0	0 0.0	5 22.7
全体	7 31.8	6 27.3	5 22.7	0 0.0　0.0	4 18.2	22 100.0

した時点で行動を起こし，献血に向かった。そして第2，第3の情報接触の時には，すでに献血後であったために，その情報は単に情報を伝えるだけという印象を与えたのかも知れない。情報接触後の献血行動履行までの時間については後述する。

さらに，この知覚された情報の性質を，情報源と被調査者群の2つの側面から比較してみた（**表V-1-18**）。その結果，マス・メディアから得た情報が，パーソナルな源泉からの情報よりも一層勧誘的だと知覚される傾向が見られた。さらにこれを，被調査者群別に見ると，献血者群では，メディアによる差がほとんど見られないのに較べて，非献血者群では，パーソナルな源泉からの情報を単に事実を伝えるだけと知覚する傾向が認められた。

表V—1—18　情報源泉及び被調査者群別にみた接触情報の勧誘度

		勧誘的	どちらでもない	伝えるだけ	計
献血者群	パーソナル・メディア	31 67.4　15.1	7 15.2　17.5	8 17.4　14.8	46 15.4
	マス・メディア	174 68.8　84.9	33 13.0　82.5	46 18.2　85.2	253 84.6
	計	205 68.6　100.0	40 13.4　100.0	54 18.1　100.0	299 100.0
非献血者群	パーソナル・メディア	2 15.4　8.7	5 38.5　38.5	6 46.2　40.0	13 25.5
	マス・メディア	21 55.3　91.3	8 21.1　61.5	9 23.7　60.0	38 74.5
	計	23 45.1　100.0	13 25.5　100.0	15 29.4　100.0	51 100.0
全体	パーソナル・メディア	33 55.9　14.5	12 20.3　22.6	14 23.7　20.3	59 16.9
	マス・メディア	195 67.0　85.5	41 14.1　77.4	55 18.9　79.7	291 83.1
	計	228 65.1　100.0	53 15.1　100.0	69 19.7　100.0	350 100.0

7）献血依頼情報の影響度

人々は，接触した献血依頼情報によって，どの程度献血への影響を受けたのであろうか。我々は，情報の影響度を，「非常に影響した」（5点）から「まったく影響しなかった」（1点）までの5段階で評定することを求めた。

その結果，献血者群（平均4.41点，分散1.16）と非献血者群（平均2.80点，分散1.55）との間に，有意な差が存在することが見られた（$t=9.58$，$df=357$，$p<.001$）。すなわち，献血者は，

表V—1—19　献血依頼情報の影響度（総合）

	非常に影響した	少し影響した	どちらともいえない	あまり影響しなかった	まったく影響しなかった	計
献血者	212 68.6　97.2	53 17.2　88.3	15 4.9　46.9	16 5.2　59.3	13 4.2　59.1	309 86.1
非献血者	6 12.0　2.8	7 14.0　11.7	17 34.0　53.1	11 22.0　40.7	9 18.0　40.9	50 13.9
全体	218 60.7	60 16.7	32 8.9	27 7.5	22 6.1	359 100.0

非献血者よりも一層，献血依頼の情報が自分達の行動に影響を与えたと感じていた（**表V-1-19**）。

また，情報接触の機会別にその影響度を比較すると，献血者群の方が，非献血者群よりも一層影響を受けていたというこの傾向は，第1情報において最も顕著である。さらに，第2情報でも5％水準で有意な差を示し，第3情報では傾向が見られるのみであった（**表V-1-20，V-1-21，V-1-22**）。

表V—1—20　献血依頼情報の影響度（第1情報）

	非常に影響した	少し影響した	どちらともいえない	あまり影響しなかった	まったく影響しなかった	計
献血者	177 69.1　97.3	46 18.0　92.0	11 4.3　50.0	13 5.1　59.1	9 3.5　50.0	256 87.1
非献血者	5 13.2　2.7	4 10.5　8.0	11 28.9　50.0	9 23.7　40.9	9 23.7　50.0	38 12.9
全体	182 61.9	50 17.0	22 7.5	22 7.5	18 6.1	294 100.0

表V—1—21　献血依頼情報の影響度（第2情報）

	非常に影響した	少し影響した	どちらともいえない	あまり影響しなかった	まったく影響しなかった	計
献血者	25 69.4　96.2	5 13.9　71.4	2 5.6　40.0	2 5.6　66.7	2 5.6　66.7	36 81.8
非献血者	1 12.5　3.8	2 25.0　28.6	3 37.5　60.0	1 12.5　33.3	1 12.5　33.3	8 18.2
全体	26 59.1	7 15.9	5 11.4	3 6.8	3 6.8	44 100.0

表V—1—22　献血依頼情報の影響度（第3情報）

	非常に影響した	少し影響した	どちらともいえない	あまり影響しなかった	まったく影響しなかった	計
献血者	10 58.8 100.0	2 11.8 66.7	2 11.8 40.0	1 5.9 50.0	2 11.8 100.0	17 77.3
非献血者	0 0.0 0.0	1 20.0 33.3	3 60.0 60.0	1 20.0 50.0	0 0.0 0.0	5 22.7
全体	10 45.5	3 13.6	5 22.7	2 9.1	2 9.1	22 100.0

つぎに，6)の勧誘度の場合と同様に，情報の源泉の違いと被調査者群別にこの比較を行なった。その結果，全体的には，パーソナルな源泉からの情報よりも，マス・メディアから得た情報に一層影響されたと感じる傾向があった。しかしこれを，被調査群と組み合せて見ると，献血者群では，マス・メディアから得た情報の方に一層影響されたと感じる傾向があったのに較べて，非献血者群では，むしろ，影響されたとするものがパーソナルな源泉から情報を得たものの方に多い傾向が認められた（**表V-1-23**）。

表V—1—23　情報源泉及び被調査者別にみた接触情報の影響度

		影響した	どちらでもない	影響しなかった	計
献血者群	パーソナル・メディア	37 80.4 14.3	0 0.0 0.0	9 19.6 34.6	46 15.4
	マス・メディア	222 87.7 85.7	14 5.5 100.0	17 6.7 65.4	253 84.6
	計	259 86.6 100.0	14 4.7 100.0	26 8.7 100.0	299 100.0
非献血者群	パーソナル・メディア	4 33.3 33.3	4 33.3 23.5	4 33.3 20.0	12 24.5
	マス・メディア	8 21.6 66.7	13 35.1 76.5	16 43.2 80.0	37 75.5
	計	12 24.5 100.0	17 34.7 100.0	20 40.8 100.0	49 100.0
全体	パーソナル・メディア	41 70.7 15.1	4 6.9 12.9	13 22.4 28.3	58 16.7
	マス・メディア	230 79.3 84.9	27 9.3 87.1	33 11.4 71.7	290 83.3
	計	271 77.9 100.0	31 8.9 100.0	46 13.2 100.0	348 100.0

さらに，情報の知覚された勧誘度と情報の影響度との関連についてみると，この両項目間に有意な連関が見られた（**表V-1-24**）。すなわち，接触した情報を勧誘的と知覚した人ほど，その情報に影響されたと思っていた。

表V—1—24　情報の知覚された性質と情報の効果の連関

		勧誘的	どちらでもない	伝えるだけ	計
献血者群	影響した	195 73.9　93.3	31 11.7　70.5	38 14.4　69.1	264 85.7
	どちらでもない	5 33.3　2.4	5 33.3　11.4	5 33.3　9.1	15 4.9
	影響しなかった	9 31.0　4.3	8 27.6　18.2	12 41.4　21.8	29 9.4
	計	209 67.9　100.0	44 14.3　100.0	55 17.9　100.0	308 100.0
非献血者群	影響した	8 61.5　33.3	3 23.1　23.1	2 15.4　14.3	13 25.5
	どちらでもない	7 41.2　29.2	7 41.2　53.8	3 17.6　21.4	17 33.3
	影響しなかった	9 42.9　37.5	3 14.3　23.1	9 42.9　64.3	21 41.2
	計	24 47.1　100.0	13 25.5　100.0	14 27.5　100.0	51 100.0
全体	影響した	203 73.3　87.1	34 12.3　59.6	40 14.4　58.0	277 77.2
	どちらでもない	12 37.5　5.2	12 37.5　21.1	8 25.0　11.6	32 8.9
	影響しなかった	18 36.0　7.7	11 22.0　19.3	21 42.0　30.4	50 13.9
	計	233 64.9　100.0	57 15.9　100.0	69 19.2　100.0	359 100.0

8）献血依頼情報の伝達

献血依頼の情報に接した人達は，その情報をさらに誰かに伝えただろうか。これより以降の項では，情報が誰に，どのような内容で，どのようにして伝わって行ったのかを見る。

献血依頼情報に接した者の中で，他の人にその情報を伝えた人の割合いは，献血者群で58.4%と半数を占める。これに比して，非献血者群では，逆に情報を伝えなかった者の割合いが，64.3%と高くなっている（**表V-1-25**）。

表V—1—25　献血依頼情報の伝達（総合）

	伝えた	伝えなかった	計
献血者	149 58.4　90.9	106 41.6　79.7	255 85.9
非献血者	15 37.7　9.1	27 64.3　20.3	42 14.1
全体	164 55.2	133 44.8	297 100.0

9）献血依頼情報の伝達時刻

献血依頼情報の伝達は，いつごろ行なわれたのだろうか。**表V-1-26** を見ると，献血者群では11時台で最も大きい割合いを示しているのに対して，非献血者群では，13時以降が最も大きい割合いを示している。12時台までに，誰かに情報を伝えた者の割合いは，献血者群で77.4%とかなり大きい値を示しており，全般に献血者群の方が早い時点で誰かに情報を伝えているようである。

表V—1—26　献血依頼情報の伝達時刻（総合）

	10時台	11時台	12時台	13時以降	計
献血者	17 10.7　89.5	64 40.3　98.5	42 26.4　95.5	36 22.6　85.7	159 93.5
非献血者	2 18.2　10.5	1 9.1　1.5	2 18.2　4.5	6 54.5　14.3	11 6.5
全体	19 11.2	65 38.2	44 25.9	42 24.7	170 100.0

10）献血依頼情報の伝達相手

献血依頼の情報は，主に誰に伝えられたのだろうか。献血者群では，「家族」(40.2%)，「職場の人」(24.7%)，「友人・知人」(22.8%) と多様な人達にかなりの割合いで伝えられていること

表V—1—27　献血依頼情報の伝達相手（総合）

	家族	親せき	近所の人	職場の人	サークルのメンバー	友人・知人	見知らぬ人	その他	計
献血者	88 40.2 88.9	14 6.4 87.5	7 3.2 100.0	54 24.7 94.7	2 0.9 100.0	50 22.8 100.0	1 0.5 100.0	3 1.4 75.0	219 92.8
非献血者	11 64.7 11.1	2 11.8 12.5	0 0.0 0.0	3 17.6 5.3	0 0.0 0.0	0 0.0 0.0	0 0.0 0.0	1 5.9 25.0	17 7.2
全体	99 41.9	16 6.8	7 3.0	57 24.2	2 0.8	50 21.2	1 0.4	4 1.7	236 100.0

がわかる。一方，非献血者群では，「家族」(64.7%)，「職場の人」(17.6%)，「親せき」(11.8%)となっており，「家族」，「親せき」を合せると76.5%と圧倒的に肉親，親類といった身内の者への伝達に偏よっている（**表V-1-27**）。

11）献血依頼情報の伝達場所

人々は，献血依頼の情報をどこで他の人に伝えたのだろうか。**表V-1-28**を見ると，献血者群では，様々な場所で情報が伝えられているのに対して，非献血者群では，「自宅」と「職場」に限られている。特に「自宅」で伝えた者の割合いは，献血者群の48.5%に対して，非献血者群では，76.5%と高い率を示している（**表V-1-28**）。

表V—1—28　献血依頼情報の伝達場所（総合）

	自宅で	訪問先で	職場で	市場・商店で	路上で	電車・バスで	自動車の中で	学校で	その他	計
献血者	97 48.5 88.2	19 9.5 100.0	57 28.5 93.4	2 1.0 100.0	10 5.0 100.0	2 1.0 100.0	3 1.5 100.0	2 1.0 100.0	8 4.0 100.0	200 92.2
非献血者	13 76.5 11.8	0 0.0 0.0	4 23.5 6.6	0 0.0 0.0	0 0.0 0.0	0 0.0 0.0	0 0.0 0.0	0 0.0 0.0	0 0.0 0.0	17 7.8
全体	110 50.7	19 8.8	61 28.1	2 0.9	10 4.6	2 0.9	3 1.4	2 0.9	8 3.7	217 100.0

12）情報伝達の方法

人々は，どのような方法で，献血依頼の情報を他者に伝えたのだろうか。伝達方法で最も多かったのは，「口頭」によるものであり，献血者群，非献血者群による違いは見られなかった。しかしながら，献血者群の特徴は，「口頭」による者ばかりでなく，「電話」で伝えた者も見られることである（**表V-1-29**）。

表V—1—29　献血依頼情報の伝達方法（総合）

	口頭で	電話で	その他	計
献血者	169 85.8　92.3	22 11.2　75.9	6 3.0　75.0	197 92.1
非献血者	14 82.4　7.7	1 5.9　4.3	2 11.8　25.0	17 7.9
全体	183 85.5	23 10.7	8 3.7	214 100.0

13）伝達した情報の性質

人々が伝達した献血依頼の情報は，どの程度まで相手に献血することを勧めていたのだろうか。

献血への勧誘度を，「非常に勧誘的」（5点）から「まったく伝えるだけ」（1点）までの5段階で評定させた。

その結果，献血者群（平均3.42点，分散1.86）と非献血者群（平均2.69点，分散1.43）との間には，統計的に有意な差が見られた（t=2.08，df=212，p<.05）。すなわち，献血者群の方が非献血者群よりも一層勧誘的な情報を伝達していたのである（**表V-1-30**）。

また，この勧誘の程度と，勧誘を受けた程度，及び影響を受けたと思う程度との間の相関を求めると，前者で r=0.303（p<.001），後者では，r=0.206（p<.01）の有意な相関が得られた。すなわち，接触した情報で献血を勧誘され，また，それに影響されたと思う者ほど，自分自身も他者に献血を一層強く勧めていたのである。

表V—1—30　伝達した情報の勧誘度（総合）

	非常に勧誘的	やや勧誘的	どちらともいえない	どちらかといえば伝えるだけ	まったく伝えるだけ	計
献血者	52 26.3　96.3	63 31.8　98.4	22 11.1　81.5	38 19.2　86.4	23 11.6　92.0	198 92.5
非献血者	2 12.5　3.7	1 8.3　1.6	5 31.3　18.5	6 37.5　13.6	2 12.5　8.0	16 7.5
全体	54 25.2	64 29.9	27 12.6	44 20.6	25 11.7	214 100.0

14）献血の必要感

献血依頼の情報に接した人たちは，それによって自分が献血する必要性をどの程度感じていたのだろうか。我々は，献血の必要性を「非常に感じた」（5点）から「まったく感じなかった」（1点）までの5段階で評定することを求めた。

その結果，献血者群（平均4.54点，分散0.58）と非献血者群（平均3.56点，分散1.51）の間に0.1%水準で有意な差が見られた（t=4.90，df=302）。すなわち，献血者群は，非献血者群よりも献血依頼の情報に接した結果，一層献血することの必要性を感じていたのである（**表V-1-31**）。

また，勧誘された程度と，献血の必要性との相関係数は r=0.259 で，1%水準の有意な相関関係を示していた。これは，献血することを強く勧誘された者ほど，献血することが必要だと感じていたことを示している。

15）献血の義務感

献血依頼の情報に接した人たちは，それによってどの程度自分たちが献血すべきだという義務感を感じただろうか。献血への義務感を「非常に感じた」（5点）から「まったく感じなかった」（1点）までの5段階で評定することを求めた。その結果，献血者群（平均4.65点，分散0.67）と非献血者群（平均3.33点，分散1.56）との間に，統計的に有意な差が認められた（t=3.60，df=295，p<.001）。すなわち，献血者は非献血者に比べて，献血依頼の情報に接した結果，自分

表V—1—31 献血の必要感

	非常に感じた	少し感じた	どちらともいえない	あまり感じなかった	まったく感じなかった	計
献血者	169 65.8 93.9	70 27.2 84.3	10 3.9 55.6	5 1.9 45.5	3 1.2 50.0	257 86.2
非献血者	11 26.8 6.1	13 31.7 15.7	8 19.5 44.4	6 14.6 54.5	3 7.3 50.0	41 13.8
全体	180 60.4	83 27.9	18 6.0	11 5.7	6 2.0	298 100.0

が献血すべきであるという義務感を一層感じていたのである（**表V-1-32**）。

また，勧誘された程度と義務感の間には，r=0.20の相関が見られ，これは5%水準で有意であった。このことは，献血を強く勧誘されるほど，献血することが自分の義務だと感じていたことを示している。さらに，情報接触の結果感じたところの献血への必要感と義務感との相関係数は，r=0.890（p<.001）であり，非常に高い相関関係を示している。このことは，すなわち，献血依頼情報に接して，その結果，自分が献血することが必要だと感じた人は，同時に，献血することが自分の義務であるとも感じていたことを示している。

表V—1—32 献血の義務感

	非常に感じた	少し感じた	どちらともいえない	あまり感じなかった	まったく感じなかった	計
献血者	188 73.2 95.4	58 22.6 86.6	4 1.6 26.7	5 1.9 38.5	2 0.8 40.0	257 86.5
非献血者	9 22.5 4.6	9 22.5 13.4	11 27.5 73.3	8 20.0 61.5	3 7.5 60.0	40 13.5
全体	197 66.3	67 22.6	15 5.1	13 4.4	5 1.7	297 100.0

2. 献血者の行動の特徴

献血行動として，緊急事態に介入するまでには，様々の意志決定のプロセスを通過しなければならない。前述のように，Latané & Darley (1970) や Bar-Tal (1976) たちは，この意志決定の過程にいくつかの判断過程があることを示した。その判断過程には，出費と報酬の計算，介入の形式や方法の決定が含まれていた。そこで，ここでは，「献血申し出の時間」，「申し出の理由」，「献血までの不安や躊躇」，「同伴者」，「行動の手段」，「コスト」等の項目を判断過程の要因として，それらによってこの介入行動の特徴を明らかにする。なお，この節においては，献血依頼の情報に接し，なおかつ実際に献血行動に出た者，259名が分析の対象となっている。

1）献血者の属性

献血者の社会的属性については，Ⅳ.5「調査対象者の概要」の項で詳述した。ここでは，献血者の性別と年代別による分布を見る（**表V-12-1**）。

献血者のうち男性は，30才代以上に多く，女性は20才代以下に多く見られる。これは統計的にも有意であるため，今後，性別による比較では，男性の回答が30才以上の人たちの意見に，また女性の場合は，20才以下の人たちの意見に，幾分偏っていることを考慮する必要がある。

表V—2—1　献血者の性別と年代

	20才代以下	30才代—40才代	50才代以上	計
男　性	82 41.4　67.2	99 50.0　86.8	17 8.6　77.3	198 76.7
女　性	40 66.7　32.8	15 25.0　13.2	5 8.3　22.7	60 23.3
全　体	122 47.3　100.0	114 44.2　100.0	22 8.5　100.0	258 100.0

2）献血申し出の時間帯

献血者たちが，献血依頼の情報に接してから，実際に献血を行なうまでにはどのくらいの時間が経っていたのだろうか。献血者全体をみると，11時台が最も多い。これは，ガス爆発事故発生後に献血依頼の情報がテレビ・ラジオによって流れ出して間もない頃である。12時台を含めると，少なくとも情報の放送開始から1時間あまりの間に，献血者の68.7%が献血を行なうためにセンターに出向いていたのである。これは，かなり早い行動であると言える。

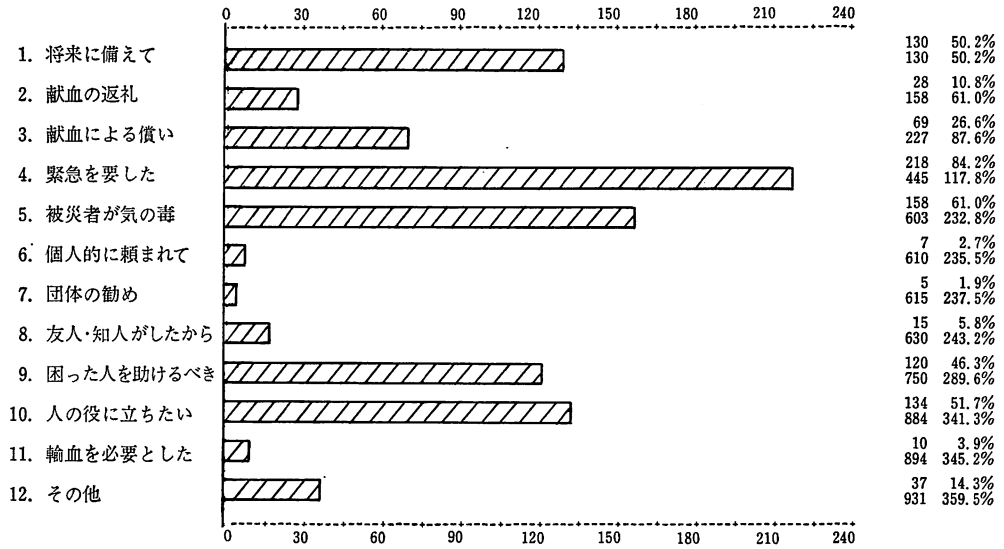
また，性別による特徴として，13時以降に献血に出向いた者の割合いが，女性で50.8%と半数を占めていることがあげられる（**表V-2-2**）。

表V—2—2　献血申し出の時間帯

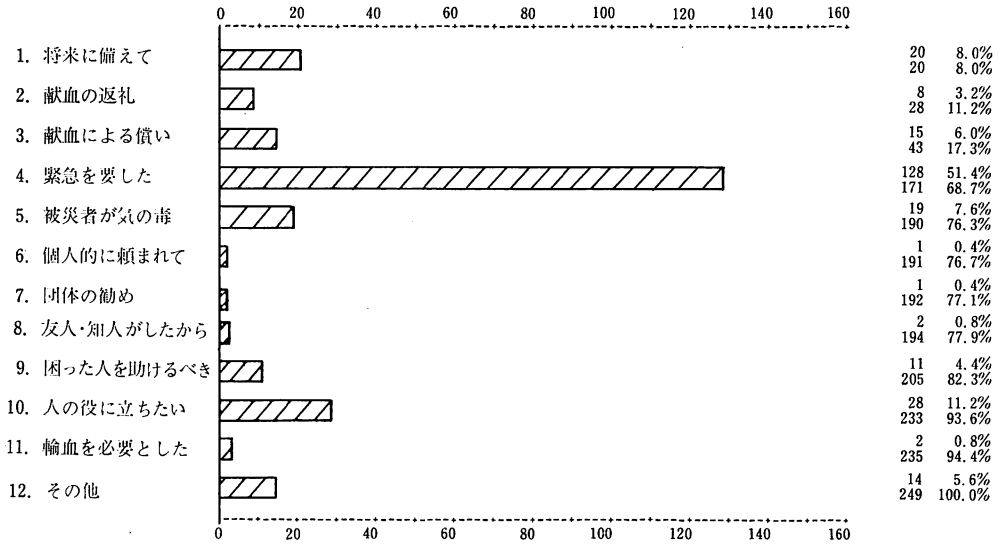
	10　時　台	11　時　台	12　時　台	13時以降	計
男　性	15 7.6　75.0	84 42.6　88.4	48 24.4　78.7	50 25.4　62.5	197 77.0
女　性	5 8.5　25.0	11 18.6　11.6	13 22.0　21.3	30 50.8　37.5	59 23.0
全　体	20 7.8	95 37.1	61 23.8	80 31.3	250 100.0

3）献血申し出の理由

献血依頼情報に接した人たちが献血を決心するには，どのような動機が働いていたのだろうか。従来，献血行動の研究の中で扱われて来た一般的な動機も含めて12項目を設定し，被調査者に，



図V—2—1　献血申し出の理由（複数回答）



図V—2—2　献血申し出の理由（最大理由）

複数の項目とさらにその中で最大の理由となる項目ひとつを選択することを求めた。

結果は，**図V-2-1**，および**図V-2-2**に示されている。ガス爆発事故の発生という状況下では，当然のことながら，「緊急事態だったので（以後，緊急性）」（複数回答23.4%，最大理由51.4%）をあげる人の割合いが最も大きい。次いで多く見られるのは，複数回答の場合では，「被災者が気の毒（以後，共感性）」（17.0%），「人の役に立ちたい（以後，愛他性）」（14.4%）などである。これらはいずれも，緊急状況の下でより一層強調される動機である。しかしながら，「愛他性」とほぼ同じ割合いで「将来に備えて」という一種の「報酬」を期待した項目が見られる。しかも，この項目は，最大理由では，「緊急性」，「愛他性」に次いで第3位に現われている。こうした緊急場面の援助行動においても，「将来の保障」という報酬が多少とも期待されているのである。なお，献血理由では，性別，および年代別による違いは見られなかった。

4）献血への不安

一般に献血行動を起こす際に最も障害となるのは，献血に対するある種の不安，例えば，血を採ることや注射針への不安などであると言われている。献血の呼びかけに応じた人達は，どの程度献血に対して不安を持っていたのだろうか。またその不安の内容はどのようなものだったのだろうか。

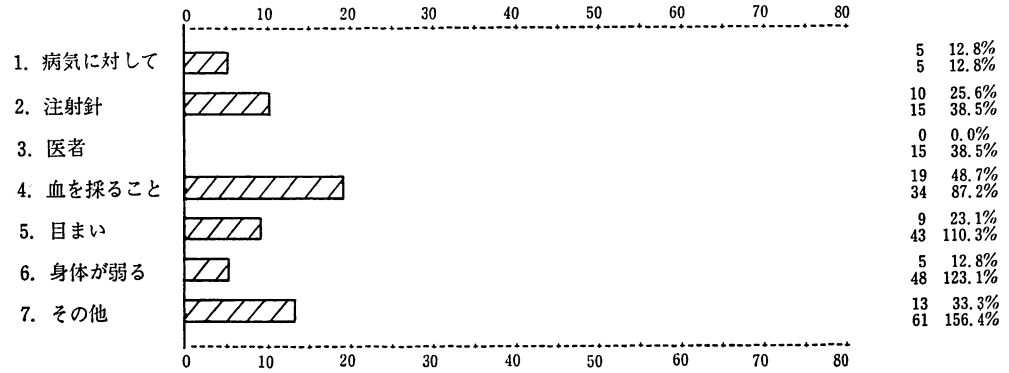
献血への不安の程度を「非常に不安であった」（5点）から「まったく不安でなかった」（1点）までの5段階で評定することを求めた。その結果，全体の平均は1.80点，（分散1.40）でほとんど不安を感じていなかったようである。これを，不安を感じていなかった者の割合いで見ると，全体の76.4%にも及んでいる。しかしながら，年代別に見ると，20才代以下と30才代以上の人たちとの間に有意な差が見られた。すなわち，30才代以上の人たち（平均1.53点，分散0.96）よりも，20才代以下の人たち（平均2.10，分散1.73）の方がより不安を感じていたのである（$t=3.75$, $df=202.50$, $p<.001$）。

表V—2—3　年代別にみた献血への不安の程度

	非常に不安であった	少し不安であった	どちらともいえない	あまり不安でなかった	まったく不安でなかった	計
20才代以下	5 4.5　100.0	22 19.8　68.8	5 4.5　27.8	26 23.4　76.5	53 47.4　36.8	111 47.6
30才代—40才代	0 0.0　0.0	10 9.7　31.3	10 9.7　55.6	6 5.8　17.6	77 74.8　53.5	103 44.2
50才代以上	0 0.0　0.0	0 0.0　0.0	3 15.8　16.7	2 10.5　5.9	14 73.7　9.7	19 8.2
全　体	5 2.1	32 13.7	18 7.7	34 14.6	144 61.8	233 100.0

つぎに，多少なりとも不安を感じていた者，37名に，その不安の内容を尋ねた（回答は複数回答)。その結果，全体で第1位は，「血を採ること」(31.1%）であり，第2位「その他」(21.3%)，第3位「注射針」(16.4%）であった。第1位，第3位は，一般的な献血に対する恐れや不安を現わしている。しかしながら，第2位のその他の内容で最も多いものは，「自分の現在の健康状態が採血基準に合わないのでは」(66.7%）という不安であり，これは，一般に言う献血に対する情緒的な恐れとは異質のものである。

また，統計的に有意ではないが，男性では「血を採ること」への不安を，女性では「注射針」への不安をあげる者が多く見られ勝ちであった（**図V-2-3，表V-2-4**)。



図V—2—3 不安の内容（複数回答）

表V—2—4 性別でみる不安の内容

	病気に対して	注射針	医　者	血を採ること	目まい	からだが弱ること	その他	計
男　性	2 4.9 40.0	6 14.6 60.0	0 0.0 0.0	14 34.1 73.7	6 14.6 66.7	4 9.8 80.0	9 22.0 69.2	41 67.2
女　性	3 15.0 60.0	4 20.0 40.0	0 0.0 0.0	5 25.0 26.3	3 15.0 33.3	1 5.0 20.0	4 20.0 30.8	20 32.8
全　体	5 8.2	10 16.4	0 0.0	19 31.1	9 14.8	5 8.2	13 21.3	61 100.0

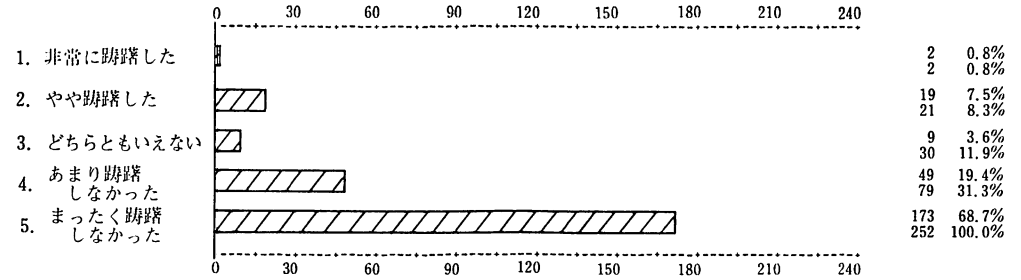
5）躊躇の程度

献血依頼の情報に接してから，献血の申し出を決心するまでに，何か躊躇するようなことはなかったのだろうか。

躊躇の程度について「非常に躊躇した」(5点）から「まったく躊躇しなかった」(1点）まで

の５段階による評定を求めた。各評定段階の対象者の割合いを見ると，全体の７割弱が「まったく躊躇しなかった」と，また２割程が「あまり躊躇しなかった」と回答しており，ほとんどの者が躊躇しなかったようである。

また，躊躇の程度は，性別によって違いは見られなかったが，年代間に差が見られた。すなわち，30才代以上の者（平均1.38点，分散0.63）よりも，20才代以下の者（平均1.69点，分散1.11）の方が，より一層躊躇していたのである（**図V-2-4，表V-2-5**）。



図V—2—4 躊 躇 の 程 度

表V—2—5 年代別にみた躊躇の程度

	非常に躊躇した	少し躊躇した	どちらともいえない	あまり躊躇しなかった	まったく躊躇しなかった	計
20才代以下	2 1.7 100.0	12 10.2 63.2	4 3.4 44.4	29 24.6 59.2	71 60.2 41.0	118 46.8
30才代—40才代	0 0.0 0.0	7 6.3 36.8	5 4.5 55.6	19 17.0 38.8	81 72.3 46.8	112 44.4
50才代以上	0 0.0 0.0	0 0.0 0.0	0 0.0 0.0	1 4.5 2.0	21 95.5 12.1	22 8.7
全　体	2 0.8	19 7.5	9 3.6	49 19.4	173 68.7	252 100.0

６）同伴者の有無と同伴の相手，およびその人数

献血することを決心した人たちは，それでは，どのようにして献血場所に向かったのだろうか。まず，誰かと一緒に出向いたのか，あるいはひとり出向いたのだろうか。

全体の59.0%の者は，ひとりで出かけている。これを性別で見ると，統計的に有意ではないが，ひとりで出かけた者の割合いは，男性に大きく，誰かと一緒に出かけた者の割合いは，女性に大きく見られた（**表V-2-6**）。また，年代別に見ると，20才代以下に一緒に出かけた者が多く，30才代以上では，ひとりで出かけた者が多かった（**表V-2-7**）。

表V—2—6 性別でみた同伴者の有無

	一人で	一緒に	計
男性	118 62.1 80.3	72 37.9 70.6	190 76.3
女性	29 49.2 19.7	30 50.8 29.4	59 23.7
全体	147 59.0	102 41.0	249 100.0

表V—2—7 年代別に見た同伴者の有無

	一人で	一緒に	計
20才代以下	56 47.5 38.1	62 52.5 60.8	118 47.4
30才代—40才代	79 70.5 53.7	33 29.5 32.4	112 45.0
50才代以上	12 63.2 8.2	7 36.8 6.9	19 7.6
全体	147 59.0	102 41.0	249 100.0

つぎに，同伴した相手では，全体で「職場の人」が最も多く，次いで「友人・知人」が多く見られる。これを性別でみると，男性では，「職場の人」と一緒だった者の割合いが大きいのに較べて，女性では，「家族」と一緒だった者の割合いが大きい（**表V-2-8**）。

表V—2—8 性別でみた同伴の相手

	家族	親せき	近所の人	サークルの人	職場の人	友人・知人	その他	計
男性	12 15.6 52.2	2 2.6 66.7	9 11.7 81.8	3 3.9 100.0	29 37.7 78.4	19 24.7 76.0	3 3.9 75.0	77 72.6
女性	11 37.9 47.8	1 3.4 33.3	2 6.9 18.2	0 0.0 0.0	8 27.6 21.6	6 20.7 24.0	1 3.4 25.0	29 27.4
全体	23 21.7	3 2.8	11 10.4	3 2.8	37 34.9	25 23.6	4 3.8	106 100.0

同伴した相手の人数は，全体では「ひとり」，すなわち，被調査者本人を含めて二人で出かけた者が最も多かった。また，「友人・知人」や「家族」と一緒の場合には，ひとりないし二人が多いのに較べて，「職場の人」と一緒の場合には，数人で出かけた者も多く見られた(**表V-2-9**)。

7）交通手段，費用，および時間

彼らはどのような方法で献血に出かけ，どれくらいの時間や費用をかけていたのだろうか。交通手段は，全体では，「徒歩」と「自転車」による者が多いが，性別，年代によって多少の違いが見られた。すなわち，男性では「徒歩」，「自転車」に次いで，「自家用車」の利用が見られるのに対し，女性では，「電車・バス」を利用した者が多い。また，20才代以下では，「徒歩」や「電車・バス」を利用している者が多いが，30才代以上では，主に「自転車」や「自家用車」を利用している（**表V-2-10a**，**表V-2-11a**）。

つぎに，負担した費用は，全体の8割以上が「無料」であった。しかしながら，女性では男性

表V—2—9　同伴者の種類と人数

	1　人	2　人	3　人	4　人	5人以上	計
家　族	13 56.5	5 21.7	4 17.4	1 4.1	0 0.0	23 100.0　21.9
親せき	1 33.3	0 0.0	1 33.3	0 0.0	1 33.3	3 100.0　2.9
近所の人	8 72.7	1 9.1	2 18.2	0 0.0	0 0.0	11 100.0　10.5
サークルの人	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	3 100.0	3 100.0　2.9
職場の人	15 40.5	6 16.2	5 13.5	4 10.8	7 18.9	37 100.0　35.2
友人・知人	15 60.0	8 32.0	2 8.0	0 0.0	0 0.0	25 100.0　23.8
その他	2 66.7	1 33.3	0 0.0	0 0.0	0 0.0	3 100.0　2.9
全　体	54 51.4	21 20.0	14 13.3	5 4.8	11 10.5	105 100.0

に較べて，「500円以上」の出費をしている者の割合いが大きい。年代間には，大きな違いは見られなかった（**表V-2-10b**，**表V-2-11b**）。

献血に出かけるためにかかった時間は，全体では，「20分まで」とする者が最も多い。性別で見ると，男性では，その8割近くが「20分まで」であるのに較べて，女性では「1時間」，および「1時間以上」要している者の割合いが大きい（**表V-2-10c**，**表V-2-11c**）。

表V—2—10a　年代別にみた交通手段

	電車・バス	タクシー	自家用車	自転車	徒　歩	その他	計
20才代以下	9 7.1　60.0	3 2.4　60.0	20 15.7　37.7	29 22.8　38.2	46 36.2　55.4	20 15.7　50.0	127 46.7
30才代—40才代	6 4.9　41.0	2 1.6　40.0	28 23.0　52.8	35 28.7　46.1	32 26.2　38.6	19 15.6　47.5	122 44.9
50才代以上	0 0.0　0.0	0 0.0　0.0	5 21.7　9.4	12 52.2　15.8	5 21.7　6.0	1 4.3　2.5	23 8.5
全　体	15 5.5	5 1.8	53 19.5	76 27.9	83 30.5	40 14.7	272 100.0

表V—2—10b　年代別にみた費用

	無　料	500円まで	500円以上	計
20才代以下	91 79.1　45.3	16 13.9　50.0	8 7.0　57.1	115 46.6
30才代—40才代	89 80.9　44.3	15 13.6　46.9	6 5.5　42.9	110 44.5
50才代以上	21 95.5　10.4	1 4.5　3.1	0 0.0　0.0	22 8.9
全　体	201 81.4	32 13.0	14 5.7	247 100.0

表V—2—10c　年代別にみた時間

	20分まで	1時間まで	1時間以上	計
20才代以下	86 72.9　45.0	26 22.0　56.5	6 5.1　46.2	118 47.2
30才代—40才代	87 79.1　45.5	16 14.5　34.8	7 6.4　53.8	110 44.0
50才代以上	18 81.8　9.4	4 18.2　8.7	0 0.0　0.0	22 8.8
全　体	191 76.4	46 18.4	13 5.2	250 100.0

表V—2—11a　性別にみた交通手段

	電車・バス	タクシー	自家用車	自転車	徒　歩	その他	計
男　性	6 2.9　40.0	4 1.9　80.0	48 23.0　90.6	57 27.3　75.0	58 27.8　69.9	36 17.2　90.0	209 76.8
女　性	9 14.3　60.0	1 1.6　20.0	5 7.9　9.4	19 30.2　25.0	25 39.7　30.1	4 6.3　10.0	63 23.2
全　体	15 5.5	5 1.8	53 19.5	76 27.9	83 30.5	40 14.7	272 100.0

表V—2—11b　性別にみた費用

	無　料	500円まで	500円以上	計
男　性	157 83.1　78.1	24 12.7　75.0	8 4.2　57.1	189 76.5
女　性	44 75.9　21.9	8 13.8　25.0	6 10.3　42.9	58 23.5
全　体	201 81.4	32 13.0	14 5.7	247 100.0

表V—2—11c 性別にみた時間

	20分まで	1時間まで	1時間以上	計
男　性	152 79.6　79.6	32 16.8　69.6	7 3.7　53.8	191 76.4
女　性	39 66.1　20.4	14 23.7　30.4	6 10.2　46.2	59 23.6
全　体	191 76.4	46 18.4	13 5.2	250 100.0

8）犠牲にしたものの有無とその内容

献血呼びかけに応じて，献血に向かった人たちは，何かを犠牲にしてまでも出かけたのだろうか。また，犠牲にしたものの内容はどのようなものだったのだろうか。

全体では，「犠牲にしたものがある」と回答した者が，42.2％と半数にも満たない。性別，年代別にこれを見ると，統計的に有意ではないが女性よりも男性の方に，また20才代以下よりも，30才代以上の者に「犠牲にしたものがある」者の割合いが大きい（**表V-2-12，表V-2-13**）。

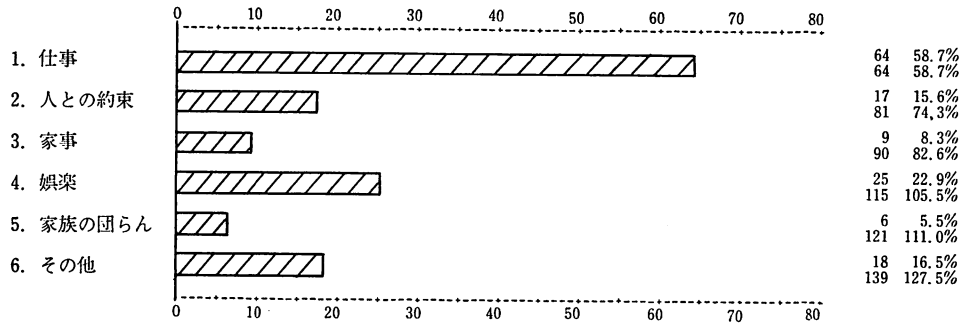
犠牲にしたものの内容は，「仕事」（46.0％）が最も多く，これに次いで「娯楽」（18.0％）があげられている。性別で見ると，男性，女性共に第1位は「仕事」をあげているが，第2位には，男性は「娯楽」を，女性は「仕事」をあげている（**図V-2-5，表V-2-14，表V-2-15**）。

表V—2—12 性別でみる犠牲の有無

	有	無	計
男　性	83 43.2　78.3	109 56.8　75.2	192 76.5
女　性	23 39.0　21.7	36 61.0　24.8	59 23.5
全　体	106 42.2	145 57.8	251 100.0

表V—2—13 年代別でみる犠牲の有無

	有	無	計
20才代以下	46 39.0　43.4	72 61.0　49.7	118 47.0
30才代—40才代	50 44.6　47.2	62 55.4　42.8	112 44.6
50才代以上	10 47.6　9.4	11 52.4　7.6	21 8.4
全　体	106 42.2	145 57.8	251 100.0



図V—2—5 犠牲にしたものの内容（複数回答）

表V—2—14 性別にみた犠牲にしたものの内容

	仕事	人との約束	家事	娯楽	家庭のだんらん	その他	計
男性	52 59.1 81.3	12 11.3 70.6	3 2.8 33.3	21 19.8 84.0	3 2.8 50.0	15 14.2 83.3	106 76.3
女性	12 36.4 18.8	5 15.2 29.4	6 18.2 66.7	4 12.1 16.0	3 9.1 50.0	3 9.1 16.7	33 23.7
全体	64 46.0	17 12.2	9 6.5	25 18.0	6 4.3	18 12.9	139 100.0

表V—2—15 年代別にみた犠牲ににしたものの内容

	仕事	人との約束	家事	娯楽	家庭のだんらん	その他	計
20代	20 30.8 31.3	10 15.4 58.8	4 6.2 44.4	14 21.5 56.0	5 7.7 83.3	12 10.5 66.7	65 46.8
30—40代	36 56.3 56.3	6 9.4 35.3	5 7.8 55.6	10 15.6 40.0	1 1.6 16.7	6 9.4 33.3	64 46.0
50代	8 80.0 12.5	1 10.0 5.9	0 0.0 0.0	1 10.0 4.0	0 0.0 0.0	0 0.0 0.0	10 7.2
全体	64 46.0	17 12.2	9 6.5	25 18.0	6 4.3	18 12.9	139 100.0

9）献血の満足感

献血の呼びかけに応じて献血を行なった人たちは，献血後，自からの行為に対してどの程度満足感を持ったのだろうか。献血後の満足感を，「非常に満足した」（5点）から「まったく満足しなかった」（1点）までの5段階で評定することを求めた。

その結果，男性の平均4.09点，（分散0.69）と女性の平均4.30点（分散0.89）の間に差のある傾向が見られた（$t=1.65$，$df=256$，$p<.10$）。すなわち，男性よりも女性の方がより満足して

いる傾向にあったのである。

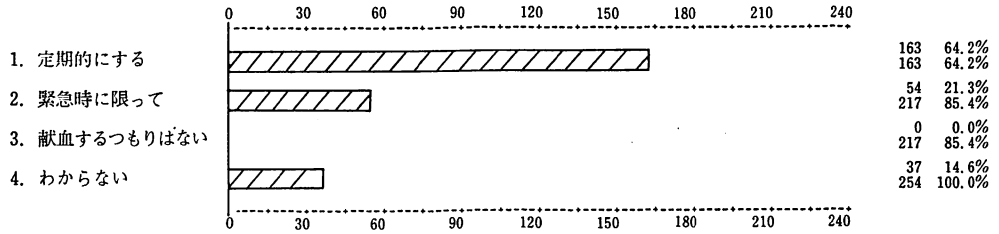
また，献血者全体の割合いで見ると，75.6%の人達が満足していると答えており，全体に満足感は高かった（**表V-2-16**）。

表V—2—16　献血後の満足感

	非常に満足した	少し満足した	どちらでもない	あまり満足しなかった	まったく満足しなかった	計
男　性	73 36.9　68.2	75 37.9　85.2	45 22.7　80.4	5 2.5　83.3	0 0.0　0.0	198 76.7
女　性	34 56.7　31.8	13 21.7　14.8	11 18.3　19.6	1 1.7　16.7	1 1.7　100.0	60 23.3
全　体	107 41.5	88 34.1	56 21.7	6 2.3	1 0.4	258 100.0

10）今後の献血意図

献血の呼びかけに応じて献血した人達は，今後の献血に対してどのような態度を持っていたのだろうか。今後も「定期的に献血する」と答えた者の割合いは，全体の64.2%であり，過半数を占めている。「今後，献血するつもりはない」と答えた者はいないが，全体の２割の者が，「緊急時に限ってする」と答えている。今後の献血意図では，性別，年代別で大きな違いは見られなかった（**図V-2-6**）。



図V—2—6　今後の献血意図

3. 献血一般について

援助行動を促進させる要因として，過去の援助経験を取り上げた。ある援助状況に接した時，以前に同様の援助経験を持つ者は，より援助行動を起こしやすいだろう。特に献血行動のように，最も行動の障害となるものが，「血や注射針に対する情緒的な不安や恐布」である場合，一度経験するということで，後の行動では，そうした不安による障害は大いに減じるだろう。したがって，献血依頼の情報に接した者が，その呼びかけに応じようと決心する時に，その人自身の献血経験は，その行動の決定に大きく影響したと思われる。

そこで，本節では，献血にかかわる環境として，「献血に関する知識」，「献血経験」，「身近な献血者の有無」等を取り上げて，献血者群と非献血者群，あるいは，情報に接して，呼びかけに応じた者と応じなかった者の比較分析を行なった。

1）献血に関する知識

献血にはいくつかの採血基準が設けられている。それは，その基準に該当する者が，献血できないというものである。こうした献血に関する知識をどの程度持っているかによって，その人と献血とのかかわりの深さを知ることができるだろう。我々は，以下の7つの採血基準のそれぞれについて，被調査者が知っているかどうかを尋ねた。その基準とは，

① 血液比重が1.052未満の人

② 過去1ケ月の間に献血した人

③ 満16才未満の人，および満65才以上の人

④ 体重が45 kg以下の男子，および40 kg以下の女子

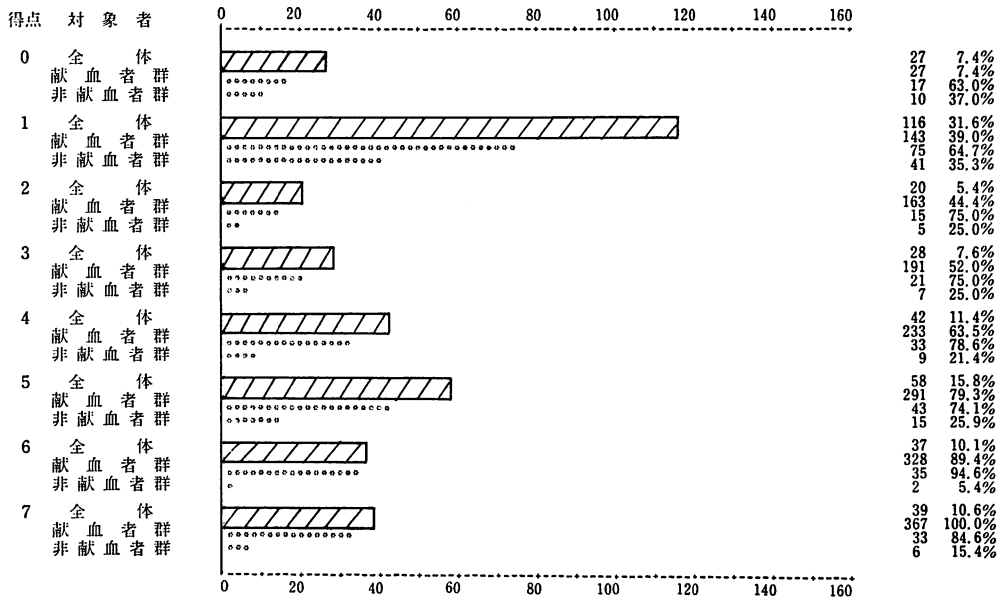
⑤ 過去6ケ月以内に妊娠した人，および妊娠中の人

⑥ 採血により，悪化するおそれがある循環系疾患，血液疾患その他の疾患をわずらっていると認められた人

⑦ 有熱者，その他健康状態が不良であると認められた人

である。

以上7項目のうち，いくつの項目を知っているかによって，認知の程度の得点化を行なった。



図V—3—1 認知得点の度数分布

すなわち，どれか1項目のみを知っている者には1点，すべての項目を知っている者には7点が与えられる。したがって得点は，すべての項目を知らない者が持つ最小値0点から最大値7点までの間に分布する。

対象者の採血基準の認知得点の分布は，**図V-3-1**に示してある。1項目のみを知る者が最も多く，全体の3割を占めている。また，すべての項目を知っている者は，全体の1割である。この認知得点を，献血者群と非献血者群とで比較すると，両群間で有意な差が認められた。すなわち，献血者群（平均3.51点，分散5.33）の方が非献血者群（平均2.49点，分散4.44）よりも一層多くの項目を認知していた（$t=3.79$，$df=365$，$p<.001$）（**表V-3-1**）。

表V—3—1　被調査者群別にみた認知得点

	0	1	2	3	4	5	6	7	計
献血者群	17 6.3 63.0	75 27.6 64.7	15 5.5 75.0	21 7.7 75.0	33 12.1 78.6	43 15.8 74.1	35 12.9 94.6	33 12.1 84.6	272 74.1
非献血者群	10 10.5 37.0	41 43.2 35.3	5 5.3 25.0	7 7.4 25.0	9 9.5 21.4	15 15.8 25.9	2 2.1 5.4	6 6.3 15.4	95 25.9
全体	27 2.7	116 31.6	20 5.4	28 7.6	42 11.4	58 15.8	37 10.1	39 10.6	367 100.0

2）過去の献血経験

今回の事故以前に献血の経験があったかどうかは，献血呼びかけに応じるか否かに影響を与えただろう。献血の呼びかけに応じた人と応じなかった人の献血経験を比較したのが **表V-3-2** である。その結果は明らかに，呼びかけに応じた人たちに，献血経験の有る者が多く，応じなかった人たちに献血経験のない者が多いことを示している。従って，緊急時の献血行動においても，過去の献血経験が大きく影響したと思われる。

また，本人自身に献血経験はなくても，身近な人たちの中に，過去に輸血を受けた人や，献血

表V—3—2　事故以前の献血経験の有無

	有	無	計
献血者	204 79.4　92.3	53 20.6　67.9	257 86.0
非献血者	17 40.5　7.7	25 59.5　32.1	42 14.0
全体	221 73.9	78 26.1	229 100.0

経験を持つ人がいるかどうかによって，献血に対する抵抗は違ってくると考えられる。そこで，「輸血の経験」を尋ねてみたところ，全体の半数は，かつて輸血を受けた，あるいは受けた人が身近にいると回答した。しかし，献血者群と非献血者群の間に違いは見られなかった(**表V-3-3**)。

さらに「周囲の献血経験者の有無」でも，ほとんどの対象者の身近には，かつて献血したことのある人がおり，また，献血者群と非献血者群によってそれが異なることはなかった(**表V-3-4**)。すなわち，今回の献血行動に関連しているのは，本人自身の過去の献血経験であり，周囲の人の輸血あるいは献血の経験は関係なかったようである。

表V—3—3　過去の輸血経験者

	いる	いない	計
献血者	128 51.0　73.1	123 49.0　71.9	251 72.5
非献血者	47 49.5　26.9	48 50.5　28.1	95 27.5
全体	175 50.6	171 49.4	346 100.0

表V—3—4　周囲の献血経験者

	いる	いない	計
献血者	227 91.2　73.5	22 8.8　66.7	249 72.8
非献血者	82 88.2　26.5	11 11.8　33.3	93 27.2
全体	309 90.4	33 9.6	342 100.0

4.　ガス爆発事故の認知とかかわり

人々は，このガス爆発事故をどのように認知しただろうか。また，この事故と直接あるいは間接に関係している人たちと他の人たちとでは，献血の呼びかけに対する応じ方はたちってくるのではないだろうか。そこで本節では，ガス爆発事故について感じた重大さと身近さの程度，および事故の被災者との関係が献血行動に及ぼす影響について取り上げる。

1）ガス爆発事故の重大感

ガス爆発事故の発生を知り，それをどの程度重大だと感じていたのだろうか。事故の重大さを，「非常に重大だと思った」（5点）から「重大だと思うことはまったくなかった」（1点）までの5段階で評定することを求めた。その結果，献血者群（平均4.82点，分散0.27）と非献血者群

表V—4—1　事故の重大感

	非常に重大だと思った	少し重大だと思った	どちらともいえない	あまり重大だと思わなかった	まったく重大だと思わなかった	計
献血者	235 87.0　72.3	25 9.3　86.2	7 2.6　87.5	3 1.1　100.0	0 0.0　0.0	270 74.0
非献血者	90 94.7　27.7	4 4.2　13.8	1 1.1　12.5	0 0.0　0.0	0 0.0　0.0	95 26.0
全体	325 89.0	29 7.9	8 2.2	3 0.8	0 0.0	365 100.0

（平均 4.94点，分散 0.08）の両群共に，平均値は非常に高く，分散も小さかった。すなわち，これは，ほとんどすべての人が「非常に重大である」と感じていたことを示している。

さらに両群を比較すると，5％水準で有意差が認められた（t＝2.67，df＝297.51）。それは，むしろ，非献血者群の方が，献血者群よりも一層，事故を重大だと感じていたことを示している（**表V-4-1**）。

2）ガス爆発事故の身近さ感

今回のガス爆発事故は，人々にどの程度身近なものと感じさせたのだろうか。事故の身近さの程度を，「非常に身近なことと思った」（5点）から「身近なこととはまったく思わなかった」（1点）までの5段階で評定することを求めた。その結果，献血者群（平均4.70点，分散0.39）と非献血者群（平均4.79点，分散0.34）との間に有意な差は見られなかった。しかし両群共に非常に高い平均値と小さな分散を示しており，ほとんどの人たちが，この事故を「非常に身近なこと」と感じていたようである（**表V-4-2**）。

表V—4—2　事故の身近さ感

	非常に身近と思った	少し身近と思った	どちらともいえない	あまり身近と思わなかった	まったく身近と思わなかった	計
献血者	209 77.4　72.6	45 16.7　78.9	12 4.4　85.7	4 1.5　100.0	0 0.0　0.0	270 74.2
非献血者	79 84.0　27.4	11 12.8　21.1	2 2.1　14.3	0 0.0　0.0	1 1.1　100.0	94 25.8
全体	288 79.1	57 15.7	14 3.8	4 1.1	1 0.3	364 100.0

3）被災者との関係

ガス爆発事故により被害を受けた人が，自分の身近にいることも援助行動の生起に影響するだろう。献血者群と非献血者群で，被害者の有無を見ると，献血者群で身近な被害者のいる者の割合いは2割，非献血者群のその割合いは3割であり，両群間に差のある傾向が見られた（χ^2＝2.817，p＜.10）。すなわち，身近な被災者の存在は，むしろ非献血者の側に多い傾向を示しているのである（**表V-4-3**）。

また，被災者との間柄を見ると，最も多いのは，「友人・知人」の35.4％，次いで多いのは「友人・知人の近親者」（24.5％）であり，この両者でほぼ6割を占めている。そして自分の「家族や親せき」の中に被災者のいる者は，全体の2割を占めている（**表V-4-4**）。

前述の事故の「重大感」，「身近さ感」への反応も含めて，献血者の特徴を考えると，これらの要因は献血することと直接には結びついていないと思われる。なぜならば，重大であると感じる程度，身近であると感じる程度は，献血者と非献血者であまり変わりなく，むしろ非献血者の方がより強くそれらを感じているからである。これは，あまりにも自分たちの身近に被災者が発生

すると，その人たちへの個人的救助，あるいは援助に重きが置かれ，他の人たちへの援助への余裕が失なわれてしまうからかもしれない。

表V—4—3　被災者の有無

	いる	いない	計
献血者	54 20.1　66.7	214 79.9　76.7	268 74.4
非献血者	27 29.3　33.3	65 70.7　23.3	922 56.6
全体	81 22.5	279 77.5	360 100.0

表V—4—4　被災者との間柄

	家族・親せき	友人・知人	友人・知人の近親者	近所の人	仕事・職場の人	計
献血者	26 19.7　70.3	46 34.8　67.6	32 24.2　68.1	13 9.8　65.0	15 11.4　75.0	132 68.8
非献血者	11 18.3　29.7	22 36.7　32.4	15 25.0　31.9	7 11.7　35.0	5 8.3　25.0	60 31.2
全体	37 19.3	68 35.4	47 24.5	20 10.4	20 10.4	192 100.0

5.　地域社会とのかかわり

ひとつの事故に対して，人々は様々な関心を寄せる。特にその事故が，自分たちが日頃生活している場所で起こった場合には，極めて強い関心を寄せる。この関心には，日常頻繁に接している場所での事故だけに，自分達も巻き込まれていたかもしれない，というような「自己の危険」に対する不安や恐れから来るものが含まれている。それと同時に，自分たちの市や町に対する，一種の郷土愛から来るものもあるだろう。例えば，地域社会の人々に対する共感や同情などが考えられる。この共感や同情といった感情は，援助行動を促進する重要な要因と考えられている。このような地域社会への感情は，その人と地域社会とのかかわり方によって異なってくると思われる。

そこで，本節では，地域社会とのかかわりについて，居住年数，継続して住む意向の程度，近隣の人達との付き合いの程度の各側面を取り上げ，献血行動とそれらの関連の仕方を検討する。

1）居住年数

対象者たちは，県内に何年くらい居住しているのだろうか。**表V-5-1**を見ると，全体の92.3%は10年以上の居住者である。そして，居住年数では，献血者群，非献血者群による違いは見られなかった。

表V—5—1 居 住 年 数

	1年未満	5年未満	10年未満	10年以上	他府県	計
献血者	3 1.1 100.0	9 3.3 81.8	8 3.0 66.7	249 91.9 74.1	2 0.7 100.0	271 74.5
非献血者	0 0.0 0.0	2 2.2 18.2	4 4.3 33.3	87 93.5 25.9	0 0.0 0.0	93 25.5
全体	3 0.8	11 3.0	12 3.3	336 92.3	2 0.5	364 100.0

2）今後の居住継続の意向

対象者たちは，どの程度，今後も続けて静岡県内に住みたいと思っているのだろうか。居住の意向を，「ぜひ続けて住みたいと思う」（5点）から「続けて住みたいとはまったく思わない」（1点）までの5段階で評定することを求めた。

その結果，20才代以下の世代において，献血者群と非献血者群との間に差のある傾向が見られた（$t=1.65$，$df=139$，$p<.10$）。すなわち，20才代以下の非献血者は，同じ世代の献血者よりも，より県内に住み続けたいと思っている傾向を示した。しかしながら，他の世代においては，献血者群と非献血者群の間に有意差が全くみられなかった（**表V-5-2**）。

表V—5—2 居住継続の意向

	ぜひ続けて住みたい	できれば続けて住みたい	どちらでもない	あまり続けて住みたくない	まったく続けて住みたくない	他府県	計
献血者	159 58.7 68.8	61 22.5 78.2	41 15.1 95.3	6 2.2 75.0	2 0.7 66.7	2 0.7 100.0	271 74.2
非献血者	72 76.6 31.2	17 18.1 21.8	2 2.1 4.7	2 2.1 25.0	1 1.1 33.3	0 0.0 0.0	94 25.8
全体	231 63.3	78 21.4	43 11.8	8 2.2	3 0.8	2 0.5	365 100.0

3）近隣の人との付き合い

隣近所の人たちとの付き合いの程度についても，「よく付き合っている」（5点）から「まったく付き合っていない」（1点）までの5段階で評定することを求めた。その結果，全体によく付き合っており，各世代ごとに献血者群と非献血者群を比較しても，いずれも，有意な差は見られなかった（**表V-4-3**）。

前述の，居住年数，居住継続の意向と合わせて考えると，今回の献血行動と地域社会とのかかわりの程度の間には，特に関連はなかったと言える。

表V—5—3　近隣との付き合いの程度

	よく付き合っている	時々付き合っている	どちらともいえない	あまり付き合っていない	まったく付き合っていない	計
献血者	115 42.6　69.3	66 24.4　71.7	52 15.6　87.5	41 15.2　78.8	6 2.2　100.0	270 74.2
非献血者	51 54.3　30.7	26 27.7　28.3	6 6.4　12.5	11 11.7　21.2	0 0.0　0.0	94 25.8
全体	166 45.6	92 25.3	48 13.2	52 14.3	6 1.6	364 100.0

VI　おわりに

緊急状況における援助行動を研究するために，本研究で我々は，実際に発生した災害的緊急事態（地下街ガス爆発事故）に焦点を当て，その事態に人が介入するかどうかの決定に関係する要因や介入決定後の介入の仕方の特徴を明らかにすることに努めた。また，介入の前提となる緊急事態に関する情報や事態への介入依頼情報の伝幡の仕方をも検討した。その結果，かなりの事実を明らかにすることができた。

まず緊急情報の伝幡について明らかにされた主要な点をいくつか記すと，緊急事態の認知と介入依頼による援助の必要性の認識は，予測通り介入の第一条件となっていた。任意に抽出した非献血者群の人々のうちでこの情報に接触した人は全体の半数足らずであった。しかも，たとえ接触したとしても，彼らのその仕方は献血者のそれとかなり相違していた。たとえば，情報に接触したことのある非献血者は，献血者のほぼ全員が接触を完了する頃から遅れてやっとその接触を始めていたのである。また，接触情報の源泉に関しても両者に幾分かの差異が認められた。すなわち，両群ともかなりの人たちは，テレビやラジオというマス・メディアを通じて生々しい状況と切々たる援助依頼の情報を知ったが，家族・親せき，知人・友人，職場の人といったパーソナル・メディアを通じた二次的接触の割合いは非献血者群の方に一層多かったのである。

接触した情報の受け取り方とそれによる知覚された影響の程度にも両群間に差が見られた。情報接触した非献血者は，実際に事態に介入して献血した人ほど，接触した情報が事態への介入と献血を勧誘していると感じなかった。また，彼らは，自分たちの行動にそれらの情報が影響したと，献血者群の人たちほど感じなかったのである。

接触情報の影響として，献血の必要性と献血義務の感覚もまた，両群間で有意に相違していた。すなわち，情報に接したが事態に介入しなかった人たちは，介入して献血した人たちほど，献血が必要だと，また，自分自身が献血する社会的責任があると感じなかった。すなわち，援助の必要性の認識と責任の受容が介入の条件になっていたのである。

情報の伝達に関する最後の点は，受容した情報の伝達行動である。非献血者群よりも献血者群において，献血依頼情報を伝達した人が有意に多く，しかもその伝達は，献血者の場合，ほとんどが12時台までに行なわれており，非献血者よりずっと早かった。また，献血者が多様な人々に伝達したのに較べて，非献血者では家族や親せきという身内が圧倒的に多数を占めていた。さらに興味あることは，伝達した情報の性質が，献血者の場合，一層介入を勧誘するものであった。以上のように，献血者は手段の点で非献血者よりも一層積極的に，緊急情報の伝幡に関与していたのである。

緊急事態への介入の仕方，すなわち，献血行動の特徴に関して明らかにされた主要な点をいくつか記すと，まず献血者の基本的属性では，男性が30才代以上に多く，女性が20才代以下に多かった。彼らのうちの多くは，マス・メディアを通じて献血依頼の情報が流され出してから１時間あまりの間に早くも献血を行なうためにセンターに出向いていた。彼らは，情報に影響されて，それに応えるべく素早く行動したのである。その理由として，事態の緊急性が第一に挙げられた。このほかにも，被災者への共感性や愛他的性格，それに将来への保障（互助性）が献血の理由になっていた。

献血者は，一般に，行動を起こす前に不安をほとんど体験していなかったし，行動決定に躊躇することもなかったようである。少数の人は不安を感じたが，それは血を採ることに対してであった。そして20才代の人に不定を感じた人が幾分多かった。また，躊躇した人も，30才以上よりも20才代以下において多かった。多少の不安と躊躇を乗り越えるひとつの有効な方法は，誰かに同伴してもらうことである。かなりの献血者は一人でセンターに出掛けているが，不安と躊躇の程度に対応してか，20才代において，他の年代と異なり，他者と一緒に出向いたものの方が多かった。

献血者の多くは，申し出のためにセンターへ徒歩，あるいは自転車で出掛けた。そのために交通費が無料とする人が多数を占めていた。しかしながら，彼らは時間的出費を被っており，20分程度とする人が多かった。また，彼らのほぼ半数は献血のために，仕事や娯楽を犠牲にしていた。

献血者の４人に３人は自らの行為に満足しており，女性の方が男性よりも一層満足しているという傾向もうかがえた。そして献血者の３人に２人は，今後定期的に献血しようという積極的な意図を持っていた。

つぎに，献血に関係する一般的な特徴について明らかにされた主要点をいくつか記すと，採用基準など献血に関して持っている知識の水準は，明らかに，非献血者群よりも献血者群において一層高かった。今回の事故以前の献血経験の有無についてみると，経験者の割合いは有意に献血者群において一層大きかった。

ガス爆発事故の発生を知り，献血者と非献血者はともに，これを非常に重要だと，また，非常に身近なことと認知した。友人や知人，あるいは彼らの近親者という人たちが被災者になることが多いが，そのような被災者を持った人は全体の２，３割でしかなかった。

最後に，地域社会とのかかわりと緊急事態への介入との関係について明らかになった点を記すと，居住年数，今後も継続して住む意向の程度，そして近隣の人たちとの付き合いの程度から地域社会とのかかわりの度合いを表わしたところ，これと事態への介入との間には目立つ有意な関係は存在しなかった。つまり，地域社会とのつながりが密な人は，そうでない人よりも一層，地域の人々が難儀している事態の解決に積極的に係わっていくだろう，という仮説は今回の事故の場合支持されなかったのである。

今回の研究で報告されたものは，たとえば，介入行動と種々の変数の各々との間の関係の分析結果であった。このような単純で部分的な関係の分析に加えて，種々の変数が複雑に働き合って介入行動を規定するという全体的な関係の分析が必要であり，実際我々は既にそれらのいくつかを行なっている。しかし，紙幅の関係で，ここではそれらを報告しない。

緊急事態へのひとつの型の介入行動として，今回は献血行動を研究した。我々は，このような緊急事態での援助行動が，非緊急事態でのそれとどのような点で異なるかを明らかにする必要があると考える。我々は，この報告に引き続き，非緊急事態における献血行動の研究の結果を報告する予定である。

参考文献

1. Bar-Tal, D. 1976. *Prosocial Behavior: Theory and research.* New York, John Wiley & Sons.
2. Darley, J. M., & Latané, B. 1968. Bystander intervention in emergencies: Diffusion of responsibility. *Journal of Personality and Social Psychology.* **8**, 377-383.
3. Latané, B., & Darley, J. M. 1968. Group inhibition of bystander intervention in emergencies. *Journal of Personality and Social Psychology.* **10**, 215-221.
4. Latané, B., & Darley, J. M. 1970. Social determinants of bystander intervention in emergencies. In J. Macauley, & L. Berkowitz (Eds.) *Altruism and helping behavior.* New York: Academic Press.
5. Latané, B., & Rodin, J. 1969. A Lady in distress: Inhibiting effects of friend and strangers on bystander intervention. *Journal of Experimental Social Psychology.* **5**, 189-202.
6. Piliavin, J. A., & Piliavin, I. M. 1972. The effect of blood on reactions to a victim. *Journal of Personality and Social Psychology.* **23**, 353-361.
7. Piliavin, I. M., Rodin, J., & Piliavin, J. A. 1969. Good samaritanism: A underground Phenomenon? *Journal of Personality and Social Psychology.* **13**, 289-299.

この論文のもとになったデータは，筆者らと坂口哲司氏（大阪保育学院）との共同研究によって得られたものである。筆者らは，そのデータを分析し直して，この論文にまとめた。筆者らは，坂口哲司氏の研究協力に謝意を表します。

付　表

静岡駅前地下街ガス爆発事故における献血行動の調査

我々の研究班は，ここ数年来プロソシア行動，たとえば援助行動，助けあい運動などの愛他的な行動を研究してきました。今回の調査は，その一環として，献血という社会的に有意義な行為の心理学的解明を目的にしています。

ご記憶でしょうが，８月16日の朝，静岡駅前の地下商店街で二度にわたる大爆発が起り，死者14人，負傷者199人という被害を出した痛ましい大事故がありました。この爆発で負傷者が多数でたため，静岡県赤十字血液センターは，大量の輸血用血液が必要になると判断し，事故発生１時間後に，テレビ・ラジオを通じて市民に『緊急に血液がいるので献血に協力して欲しい』と呼びかけました。放送直後から，献血申し出者が殺到し，午後２時頃までには300人を越す人々が同センターに駆けつけ，負傷者への輸血に貢献しました。これらの心暖まる行為は，明らかに困っている人へのプロソシアル（援助）行動です。そこで我々は，このたびの献血行動の実態調査を実施し，そのような行動の根底にある人間心理や献血行動についての人々の考えなどを明らかにしたいと思っています。

この調査は，大部分献血行動に関する質問から成っています。まず，テレビ・ラジオや知人などを通じて献血依頼の情報がいかに伝達されたか，その経路を解明する質問があります。つぎに献血の呼びかけを受けた人がどのような意図や理由から，また何に影響されてそれに応じたかを明らかにする質問があります。さらに献血一般に関する事柄やコミュニティとのかかわりなどを聞く質問もあります。

ご了解も得ずに突然このように面倒な調査用紙をお届けする失礼をお許し下さい。暴力，傷害，争いなどの反社会的行動が頻発する最近の社会にあって，社会に望ましい影響を与える献血などの行動の研究は，今後人間同志が助けあってゆく良き社会を作り上げていくために非常に重要だと思います。そのためにどうかこの調査にご協力下さいますようお願い申し上げます。

この調査の回答は，すべてコンピュータによって処理されますので個人にご迷惑のかかることは絶対にありません。ですから，ありのままの事実とご意見をご記入下さい。どうかよろしくお願い申し上げます。

関西大学社会学部社会心理学研究室
プロソシアル行動研究班
責任者　社会学部教授　高　木　　修

ご記入上の注意

1　ご記入は宛名のご本人にお願いいたします。

2　ご回答は回答項目が用意されている場合には，あてはまる項目の番号，もしくは□が印刷されているときはその中に○印をつけて下さい。回答項目があらかじめ用意されていない場合や「その他」の項目を選択された場合には，具体的にその内容をご記入下さい。なお，質問文の最後に（**１つだけ**）と書いてある場合には，○印を１つだけつけて下さい。また（**いくつでも**）となっている質問の場合には，○印をいくつつけてもかまいません。

3　指示にしたがってすべての質問にもれなくご回答下さい。１つでも記入もれがありますと，調査票全体が無効となることがあります。

献血依頼の情報がいかに伝達されたかについてお尋ねします

問1　あなたは献血依頼の情報を聞かれましたか。（**1つだけ**）

1　聞いた　⟶ **問2へ**

2　聞かなかった ⟶ **問30へ**

〔聞かれた情報（あなたが誰かから聞かれた情報）についてお答え下さい。〕

回答は各情報ごとに**問2**から**問7**まで連続して行なって下さい。

		第1情報	第2情報	第3情報
問2	あなたはいつその情報を聞きましたか。（**いくつでも**）	（　）日（　）時頃	（　）日（　）時頃	（　）日（　）時頃
問3	あなたは誰からその情報を聞きましたか。（**1つだけ**）	1　家　族 □	□	□
		2　親せき □	□	□
		3　近所の人 □	□	□
		4　職場の人 □	□	□
		5　所属サークルのメンバー □	□	□
		6　友人・知人 □	□	□
		7　見知らぬ人 □	□	□
		8　テレビ □	□	□
		9　ラジオ □	□	□
		10　その他 □	□	□
問4	あなたはどこでその情報を聞きましたか。（**1つだけ**）	1　自宅で □	□	□
		2　訪問先で □	□	□
		3　職場で □	□	□
		4　市場や商店で □	□	□
		5　路上で □	□	□
		6　電車・バスの中で □	□	□
		7　自動車の中で □	□	□
		8　学校で □	□	□
		9　その他 □	□	□
問5	あなたはなにによってその情報を聞きましたか。（**1つだけ**）	1　口頭で □	□	□
		2　電話で □	□	□
		3　テレビ・ラジオで □	□	□
		4　その他 □	□	□
問6	その情報は，あなたが献血することをどの程度勧めていましたか。それはあなたにとって勧誘的でしたか，それとも単なる情報の伝達でしたか。（**1つだけ**）	1　非常に勧誘的 □	□	□
		2　やや勧誘的 □	□	□
		3　どちらともいえない □	□	□
		4　どちらかといえば伝えるだけ □	□	□
		5　まったく情報を伝えるだけ □	□	□
問7	献血しようとあなたが決心するのにこの情報はどの程度影響しましたか。（**1つだけ**）	1　非常に影響した □	□	□
		2　少し影響した □	□	□
		3　どちらともいえない □	□	□
		4　あまり影響しなかった □	□	□
		5　まったく影響しなかった □	□	□

問 8　あなたは聞かれた献血依頼の情報を誰かに伝えましたか。（**1つだけ**）

1　伝えた　　⟶ **問 9 へ**
2　伝えなかった ⟶ **問14へ**

〔伝えられた情報（あなたが誰かに伝えられた情報）についてお答え下さい。〕

回答は各情報ごとに**問 9** から**問13**まで連続して行なって下さい。

問 9　あなたはいつその情報を伝えましたか。（**いくつでも**）	**第 1 情 報** （ ）日（ ）時頃	**第 2 情報** （ ）日（ ）時頃	**第 3 情報** （ ）日（ ）時頃
問10　あなたは誰にその情報を伝えましたか。（**1つだけ**）	1　家　族 □	□	□
	2　親せき □	□	□
	3　近所の人 □	□	□
	4　職場の人 □	□	□
	5　所属サークルのメンバー □	□	□
	6　友人・知人 □	□	□
	7　見知らぬ人 □	□	□
	8　その他 □	□	□
問11　あなたはどこでその情報を伝えましたか。（**1つだけ**）	1　自宅で □	□	□
	2　訪問先で □	□	□
	3　職場で □	□	□
	4　市場や商店で □	□	□
	5　路上で □	□	□
	6　電車・バスの中で □	□	□
	7　自動車の中で □	□	□
	8　学校で □	□	□
	9　その他 □	□	□
問12　あなたはなにでその情報を伝えましたか。（**1つだけ**）	1　口頭で □	□	□
	2　電話で □	□	□
	3　その他の方法で □	□	□
問13　あなたはその情報によって相手が献血することをどの程度勧めましたか。強く勧めましたか，それとも単に伝えただけですか。（**1つだけ**）	1　非常に勧誘的 □	□	□
	2　やや勧誘的 □	□	□
	3　どちらともいえない □	□	□
	4　どちらかといえば伝えるだけ □	□	□
	5　まったく情報を伝えるだけ □	□	□

献血の呼びかけについてお尋ねします

問14 あなたは献血の呼びかけを聞かれたとき，自分が献血する必要性がどの程度あると感じましたか。（**1つだけ**）

1 非常に強く感じた □
2 少し感じた □
3 どちらともいえない □
4 あまり感じなかった □
5 全く感じなかった □

問15 あなたは献血の呼びかけを聞かれたとき，自分が献血すべきであるという気持をどの程度持ちましたか。（**1つだけ**）

1 非常に強く感じた □
2 少し感じた □
3 どちらともいえない □
4 あまり感じなかった □
5 全く感じなかった □

問16 あなたは結局献血の呼びかけに応じましたか。（**1つだけ**）

1 応じた ⟶ **問17へ**
2 応じなかった ⟶ **問30へ**

問17 あなたは何時頃に献血を申し出られたのですか。

（　）時（　）分頃

問18 あなたが献血の呼びかけに応じられた理由をお答え下さい。（**いくつでも**）
またその中で最も大きな理由は何でしたか。「最大の理由」欄の□内に○印をつけて下さい。（**1つだけ**）

	理由（いくつでも）	最大の理由（1つだけ）
1 将来自分や家族が献血を受けるときに備えて	□	□
2 かつて自分や家族が献血を受けたので，そのお返しをしようと思ったから	□	□
3 人は生きていくうえで多くの人に迷惑をかけているが，この献血によってすこしでもつぐなえると思ったから	□	□
4 事態がきわめて緊急な状態にあったから	□	□
5 被災者が気の毒に思えたから	□	□
6 友人や知人から個人的にぜひにと頼まれたから	□	□
7 地域の団体の勧めがあったから	□	□
8 自分の囲りの友人や知人が献血をしたから	□	□
9 ふつう世の中では困った人を助けるべきだとされているから	□	□
10 つねづね機会があれば人の役に立ちたいと思っていたから	□	□
11 家族・親せきや友人・知人が輸血を必要としたから	□	□
12 その他（具体的に：　）	□	□

問19 あなたは献血することにどの程度不安を抱きましたか。（**1つだけ**）

1 非常に不安であった
2 少し不安であった
→**問20へ**
3 どちらともいえない
4 あまり不安でなかった
5 全く不安でなかった
→**問21へ**

問20 あなたは何に不安を抱いたのですか。（**いくつでも**）

1 病気に対して □
2 注射針 □
3 医　者 □
4 血を採ること □
5 目まい □
6 からだが弱ること □
7 その他 □
（具体的に：　　）

問21 あなたは献血依頼の情報を聞かれてから，献血を申し出ることを決心されるまでにどの程度躊躇（ちゅうちょ）しましたか。決定は容易に下せましたか。それともあれこれ迷うことがありましたか。（**1つだけ**）

1 非常に躊躇した □
2 少し躊躇した □
3 どちらともいえない □
4 あまり躊躇しなかった □
5 まったく躊躇しなかった □

問22 あなたは血液センターに献血を申し出るときひとりで行きましたか。それとも誰かと一緒でしたか。（**1つだけ**）

1 ひとりで行った ⟶ **問24へ**
2 一緒に行った ⟶ **問23へ**

問23 誰と一緒に行きましたか。またそれは何人でしたか。（**いくつでも**）

1 家　族（　　）人 □
2 親せき（　　）人 □
3 近所の人（　　）人 □
4 所属するサークルの人（　　）人 □
5 職場の人（　　）人 □
6 友人・知人（　　）人 □
7 その他（　　）人 □
（具体的に：　　）

問24 あなたは血液センターに献血を申し出るためにどのようにして行きましたか。

血液センターまでの交通手段（いくつでも）	血液センターまでの総費用（1つだけ）	血液センターまでの総所要時間（1つだけ）
1 電車・バス □	1 無　料 □	1 20分まで □
2 タクシー □	2 500円まで □	2 1時間まで □
3 自家用車 □	3 500円以上 □	3 1時間以上 □
4 自転車 □		
5 徒　歩 □		
6 その他 □		
（具体的に：　　）		

問25 あなたは献血するために犠牲にしたものが何かありますか。（**1つだけ**）

1　ある ⟶ **問26へ**
2　ない ⟶ **問27へ**

問26 それはどのような内容のものでしたか。またそれはあなたにとってどの程度重要なものでしたか。

犠牲にしたもの（**いくつでも**）		犠牲にしたものの重要さ（**1つずつ**）				
		たいへん重要	やや重要	どちらでもない	あまり重要でない	まったく重要でない
1　仕　事	□	□	□	□	□	□
2　待ち合わせなど人との約束	□	□	□	□	□	□
3　家　事	□	□	□	□	□	□
4　娯　楽	□	□	□	□	□	□
5　家庭のだんらん	□	□	□	□	□	□
6　その他 （具体的に：　　）	□	□	□	□	□	□

問27 あなたは今後も献血するつもりですか。（**1つだけ**）

1　定期的に献血するつもりである　□
2　今回のような緊急時に限って献血する　□
3　献血するつもりはない　□
4　わからない　□

問28 あなたは献血した自分の行動にどれくらい満足しましたか。（**1つだけ**）

1　非常に満足した　□
2　少し満足した　□
3　どちらでもない　□
4　あまり満足しなかった　□
5　まったく満足しなかった　□

問29 あなたは献血の呼びかけを受けながら献血しなかった人をどのように思いますか。（**1つだけ**）

1　献血するしないは個人の自由である　□
2　献血しなくてもしようがなかった　□
3　なんともいえない　□
4　できるだけ努力すべきであった　□
5　献血すべきであった　□
6　その他　□
（具体的に：　　）

献血一般についてお尋ねします

問30 献血には採血基準がきめられています。次の項目に該当する人は献血することができません。あなたはこれらのことを知っていますか。（**1つだけ**）

	知っている	知らない
1 血液比重が1.052未満の人	□	□
2 過去1ケ月の間に献血した人	□	□
3 満16才未満の人，および満65才以上の人	□	□
4 体重が45 kg以下の男子，および40 kg以下の女子	□	□
5 過去6ケ月以内に姙娠した人，および姙娠中の人	□	□
6 採血により，悪化するおそれがある循環系疾患，血液疾患その他の疾患を罹（わずら）っていると認められた人	□	□
7 有熱者，その他健康状態が不良であると認められた人	□	□

問31 あなたは自分の血液型を知っていますか。（**1つだけ**）

1 知っている □
2 知らない □

問32 あなたは献血を呼びかけるポスターやチラシを見たことがありますか。（**1つだけ**）

1 見たことがある □
2 見たことがない □

あなたと献血とのかかわりについてお尋ねします

問33 あなたは今回のガス爆発事故以前に，献血したことがありますか。（**1つだけ**）

1 ある ⟶ **問34へ**
2 ない ⟶ **問37へ**

問34 今までに何回献血されましたか。

（　　）回

問35 最近ではいつ献血されましたか。

（　　）年（　　）月頃

問36 最近された献血の理由は何でしたか。（**いくつでも**）
またその中で最大の理由は何でしたか。（**1つだけ**）

	理　由（いくつでも）	最大の理由（1つだけ）
1 将来自分や家族が献血を受けるときに備えて	□	□
2 かつて自分や家族が献血を受けたので，そのお返しをしようと思ったから	□	□
3 人は生きていくうえで多くの人に迷惑をかけているが，この献血によってすこしでもつぐなえると思ったから	□	□
4 事態がきわめて緊急な状態であったから	□	□
5 血液を必要としている人が気の毒に思えたから	□	□
6 友人や知人から個人的にぜひにと頼まれたから	□	□
7 地域の団体の勧めがあったから	□	□
8 自分の囲りの友人や知人が献血したから	□	□
9 ふつう世の中では困った人を助けるべきだとされているから	□	□
10 つねづね機会があれば人のために役立ちたいと思っていたから	□	□
11 家族・親せきや友人・知人が輸血を必要としていたから	□	□
12 その他（具体的に：　　）	□	□

問37 今回のガス爆発事故以前に，あなた自身もしくはあなたの家族，親せき，友人，知人で輸血を受けた人がいますか。（**1つだけ**）

1 いる □
2 いない □

問38 また，あなたの家族，親せき，友人，知人の中でこれまでに献血した人がいますか。（**1つだけ**）

1 いる □
2 いない □

今回のガス爆発事故についてお尋ねします

問39 あなたは今回のガス爆発事故の発生を知りどの程度重大だと思いましたか。（**1つだけ**）

1 非常に重大だと思った □
2 少し重大だと思った □
3 どちらともいえない □
4 重大だと思うことはあまりなかった □
5 重大だと思うことはまったくなかった □

問40 あなたは今回のガス爆発事故をどの程度，あなた自身に身近なことだと思いましたか。（**1つだけ**）

1 非常に身近なことと思った □
2 少し身近なことと思った □
3 どちらともいえない □
4 身近なこととはあまり思わなかった □
5 身近なこととはまったく思わなかった □

問41 ところで，あなたの家族，親せき，友人，知人の中に今回のガス爆発事故で被害を受けた人がいますか。（**1つだけ**）

1　いる　⟶ **問42へ**
2　いない ⟶ **問43へ**

問42 被害を受けた人とあなたとの関係，被害の内容について答えて下さい。

あなたとの関係	被害の内容

あなたとコミュニティーとのかかわりについてお尋ねします

問43 あなたが静岡県内に住まれるようになって何年になりますか。（**1つだけ**）

1　1年未満　□
2　1年～5年未満　□
3　5年～10年未満　□
4　10年以上　□

問44 あなたはこれからもずっと静岡県内に住みたいと思いますか。（**1つだけ**）

1　ぜひ続けて住みたいと思う　□
2　できれば続けて住みたいと思う　□
3　どちらでもない　□
4　続けて住みたいとはあまり思わない　□
5　続けて住みたいとはまったく思わない　□

問45 あなたは隣近所の人たちとどの程度付き合っていますか。（**1つだけ**）

1　よく付き合っている　□
2　ときどき付き合っている　□
3　どちらともいえない　□
4　あまり付き合っていない　□
5　まったく付き合っていない　□

問46 あなたは地域の団体に所属していますか。（**1つだけ**）

1　所属している　⟶ **問47へ**
2　所属していない ⟶ **問50へ**

〔所属しておられる団体についてお尋ねします。〕

回答は各団体ごとに**問47**から**問49**まで連続して行って下さい。

	1	2	3
問47 その団体はどのような種類の団体ですか。 例えば，婦人会，消費者団体，文化サークル，青年団，あるいは自治会などのどれですか。（**いくつでも**）	＿＿＿	＿＿＿	＿＿＿
問48 その団体では献血のことが話題になりますか。（**1つだけ**）			
1　いつも話題になる	□	□	□
2　しばしば話題になる	□	□	□
3　時々話題になる	□	□	□
4　あまり話題にならない	□	□	□
5　まったく話題にならない	□	□	□
問49 今回の献血も含めて，その団体は献血を勧めて来ましたか。（**1つだけ**）			
1　勧めて来た	□	□	□
2　どちらでもない	□	□	□
3　勧めて来なかった	□	□	□

問50 あなたはこれまでに寄付，奉仕の仕事，慈善事業などの社会的に良いと思われる行為に参加したことがありますか。（**1つだけ**）

1　しばしば参加したことがある　□
2　かなり参加したことがある　□
3　ときどき参加したことがある　□
4　参加したことがない　□

最後にあなた自身のことについてお尋ねします

Ｆ１　あなたの性別は　1　男　性　□
　　2　女　性　□

Ｆ２　あなたの年齢は　（　　）才

Ｆ３　あなたの職業は
1　専門職（医師・専門技術職・教員・自由業など）□
2　管理職（官公庁の部課長・会社の経営者・重役・部課長など）□
3　会社の事務員・官公庁の事務職員□
4　工員・店員・運転手・官公庁の現場作業員・職人□
5　農　業□
6　商業・工業・土木・建築業・不動産業・理容・理髪業・接客業などの自営業主□
7　利子生活者・貸家業・アパートの管理人□
8　学　生□
9　その他（具体的に：　　）□
10　無　職□

Ｆ４　あなたの最終学歴は（中退は卒業とみなして下さい）
1　義務教育（高等小学校も含む）□
2　新制高校・旧制中学・旧制女学校・旧制実業高校□
3　短大・新制高専□
4　新・旧大学・旧制高等専門学校□
5　大学院□

Ｆ５　あなたの結婚状況は
1　未　婚□
2　既　婚□
3　その他（死別・離婚なども含む）□

Ｆ６　あなたの家族数は

1	1人	□	6	6人	□
2	2人	□	7	7人	□
3	3人	□	8	8人	□
4	4人	□	9	9人	□
5	5人	□	10	10人以上	□

ご多忙中のところ，ご協力いただきまして，誠にありがとうございました。心からお礼申し上げます。恐れいりますが，もう一度記入もれがないかどうか最初から見直して下さいますようお願い申し上げます。